



2024
パーム油白書



認定NPO法人

ボルネオ保全トラスト・ジャパン

はじめに

2024年、国内では能登半島地震、酷暑、豪雨、世界各地では洪水、旱魃、山火事と気候変動は容赦なく襲い掛かりました。また、ガザ地区での死者は4万人をはるかに超え、中東は不安定化、ロシアのウクライナ侵攻も続き、自国優先主義の政権があちこちに樹立されました。エネルギー危機、物流の混乱、物価上昇、経済格差はますます広がり、世界は分断されています。

植物油を輸入に依存している日本は、原材料の高騰、輸送コストや人件費の値上がり、歴史的な円安に企業も消費者も悩まされています。

20周年を迎えたRSPOは、RT24で「次の20年に向けてのパートナー：インパクトのための革新」と掲げ、小農への再生農業の提案、新トレーサビリティシステムなどを紹介しました。

植物油の中でパーム油の存在は重要なものです。単収が高く生産量が多いパーム油は、人口増大に対応できる唯一の植物油であり、バイオディーゼルの原料としても重宝されており、今後も価格は上がり続けるでしょう。

日本の大手パーソナルケア企業・食品企業18社の認証品導入の状況を調べました。ACOPレポート（加盟企業がRSPOに提出する年次報告書）2022と2024を比較してレポートしています。

日本のRSPO加盟企業は今や約330社、加盟数は世界4位です。

生物多様性保全は、地球上に暮らす人間全員が関わっていかなくては解決できない問題です。この白書が、持続可能なパーム油への理解の一助となれば幸いです。

パーム油白書編集委員会 青木崇史 中西宜夫 森井真理子

Part 1

知識編

CONTENTS - 1

RT2024参加報告

RT24のテーマは

「次の20年に向けてのパートナー：インパクトのための革新」

P4 ~ P5

パーム油をめぐる情勢

パーム油は、人口増大、バイオ燃料需要で
今後も生産量は増加する見込み

コラム

MSPOは新基準MSPO2.0を2025年1月に発効

P6 ~ P7

ACOPLレポート

日本の消費財大手企業18社の
RSPO認証油導入の進捗状況を調べました

パーソナルケア企業／食品企業

P8 ~ P11

日本のRSPO加盟企業リスト

日本企業のRSPO正会員は148社、
準会員は181社と増加を続けています

P12

RT24のテーマは「次の20年に向けてのパートナー：インパクトのための革新」

RSPO（持続可能なパーム油円卓会議）の年次総会「RT2024」が2024年11月11日から13日に、タイ・バンコクで開催されました。設立20周年を迎えたRSPOのこれまでの成果を振り返り、今後の展望を議論する場となりました。

中西宣夫（サラヤ調査員 BCTJ 理事）

基調講演

初代事務局長による基調講演では、緑の回廊プロジェクトも紹介されました

基調講演は初代事務局長（2004年～2006年）のテオ・チェン・ハイ氏です。RSPO設立の契機は、2002年にWWFを中心としたNGOが開催したワークショップで、パーム油や大豆油産業による森林破壊が課題として取り上げられたことです。

その後マレーシアパーム油協会（MPOA）、WWF、ユニリーバ、オーフス（英国の高級食用油脂メーカー）、MIGROS（スイスの生協）が第1回ラウンドテーブル会議（RT1）を開催し、数度の会議を経て、2004年にRSPOが正式に設立されました。



RSPO立ち上げのころ

RSPO設立直後で、正会員数は50程度、「原則と基準」もできていなかった時期のエピソードとして、2005年1月に日本企業として初めてサラヤ株式会社の更家悠介社長がセミナーで登壇したことが、日本からの貢献を象徴するものとして紹介されました。

また、サラヤが現地政府とともに進めている保全活動「ボルネオの緑の回廊事業」は、会員企業による模範的な取り組みとして高く評価されました。

講演の最後には、世界的なトレンドとして注目される“Regenerative agriculture”（再生農業）について、持続可能なアブラヤシ産業を確立するためには、このような技術や考え方を積極的に採用し、未来を見据えた取り組みが必要であると強調されました。



保全活動への取り組み「緑の回廊」

サテライトイベント

「アブラヤシ小農への再生農業の導入」シンポジウムが開催されました

ワイルドアジアによる「アブラヤシ小農への再生農業の導入」をテーマとしたシンポジウムが開催されました。

再生農業とは、土壌の健康を回復・維持し、生態系を強化しながら農業生産を行う手法で、従来の農業が環境に与える負の影響（土壌劣化や水質汚染など）を最小限に抑えるだけでなく、環境を改善し、持続可能性を超えた「再生」を目指すものです。

社会的企業（ソーシャル・エンタープライズ）として知られるワイルドアジアの代表、レザ・アズミ氏は、“原則と基準”策定過程からRSPOに関わり、その発展において重要な役割を果たしてきました。ワイルドアジアは、小規模農家をグループ化して、彼らが認証を取得しやすくするプロジェクトのパイオニアであり、多くの小規模農家グループと信頼関係を築いてきました。

2020年には、新たなスキームを導入し、小農グループに再生農業やアグロフォレストリーを推進する取り組みを開始しました。化学肥料や農薬を使用せずに有機肥料を活用し、アブラヤシの栽培だけでなく、アブラヤシの植栽の間の土地に、ショウガや果樹など多様な商用作物をいっしょに育てる手法を導入しています。

これにより、化学肥料や農薬にかかるコストを削減し、付加価値の高い農作物を販売することで、小農がアブラヤシだけに依存せず、生計を向上させることを目指しています。

さらに、この事業では、これまで十分

チェンハイ氏の基調講演





シンポジウム会場は熱気であふれていた

に再利用されてこなかったアブラヤシの葉（フロンド）を炭化し、土壌改良剤として活用する技術も取り入れています。この炭化物は土壌に埋められ、カーボンクレジットとして算定されることで、小規模農家に追加の収入をもたらす仕組みとなっています。

日本では、三井物産がこのプロジェクトへの参画を表明しており、再生農法によって生産された認証製品が日本の消費者に届けられるサプライチェーンの構築が期待されています。このプロジェクトが成功すれば、世界初のモデルケースとなる可能性があります。

分科会

「生物多様性の資金調達」には、各分野の関係者が登壇

基調講演でのトピックスにも触れられていたように、RSPOメンバーには、認証取得や認証製品の購買にとどまらず、パーム油産業全体のイメージ改善に寄与するような活動への取り組みが推奨されています。しかし、現場で実際の活動を担うNGOなどにとって、安定した活動資金の確保は依然として大きな課題です。最終日、「生物多様性の資金調達」と題した分科会で、生物多様性保全を推進するための資金調達の可能性や課題について議論が交わされました。

この分科会には、HCVネットワーク、生物多様性クレジットアライアンス、WWF、KLKプランテーション、金融機関、NGOの代表者など、生物多様性保全に関わる多様な登壇者が参加しました。その中には、ボルネオ島のマレーシア・サバ州で希少大型哺乳類の保全活動を行っているジョン・ペイン博士も含まれていました。

ジョン・ペイン博士は、1975年からマ

レーシアとインドネシアに在住し、1982年から1998年にかけてサバ州でWWFの代表を務めた後、BORA (Borneo Rhino Alliance) を設立し、スマトラサイの保全に尽力してきました。しかし、2019年にマレーシアで最後のスマトラサイが死に、同種はマレーシア国内で絶滅したと見なされています。

半世紀にわたる保全活動の経験を踏まえ、ジョン・ペイン博士は、生物多様性保全において資金調達は重要であるものの、それ以上に効果的な組織体制が不可欠であると強調しました。スマトラサイ保全に失敗した要因は資金不足ではなく、適切な意思決定が行える組織体制が欠如していたことにあると指摘しています。

ジョン・ペイン博士は、「症状ではなく原因を治療する」ことの重要性を説き、保全活動を成功させるためには、何をすべきかを明確に定めることが必要であると述べました。具体的には、少なくとも5年間持続可能な資金を確保し、明確な目標に基づいたプログラムを実施し、具体的な成果を上げる必要があると提言しました。



登壇するジョン・ペイン博士(中央)

説明会

2024年に登場した、新たなトレーサビリティシステム「PRISMA」

会場では、各セッション以外にも、2024年1月に発表された新たなトレーサビリティシステム「PRISMA」の説明会が行われていました。

PRISMAは、今後義務化が予想されるグローバルなコンプライアンス要件に対応するために設計された取引プラットフォームです。

現行の取引プラットフォーム「PalmTrace」に代わるもので、施設や

プログラム

2024年11月11日

開会式

基調講演

「振り返りと未来展望: 次の20年に向けて」

全体会議1

「任意から義務へ: 政策と貿易における国内基準と任意基準の役割」

エクセレンス賞表彰式

2024年11月12日

全体会議2

「予測困難な未来: 持続可能なパーム油需要の展望」

全体会議3

「官民連携: 持続可能な影響を促進するための協力」

全体会議4

「次の20年に向けて: 認証からシステム全体の変革へ」

座談会「次の20年を想像する」

2024年11月13日

分科会1

- 生物多様性の資金調達
- 地域アプローチの可能性への投資
- 持続可能なパーム油生産の地域的アプローチ

分科会2

- 新興市場と成熟市場における需要推進
- 持続可能な商品: 次の20年を形作るための協力
- パーム油産業を未来に備える技術革新

分科会3

- サプライチェーンのグリーン化における中流企業の役割
- 食糧安全保障とパーム油の持続可能性
- 権利と救済を強化する革新的アプローチ

閉会式

サイト情報、在庫残高などのすべてのデータがPRISMAに移行されます。

この新システムは、監査プロセスの効率化やトレーサビリティ向上を目的に、リモートセンシング技術などの最新技術を導入しています。

また、PC操作のインターフェースも従来と異なるため、会場では簡易的なトレーニングコースが提供されました。

さらに、RT2024終了後もオンライン説明会が開催される予定で、会員が新システムへの移行をスムーズに進められるようサポート体制が整えられています。

パーム油は、人口増大、バイオ燃料需要で今後も生産量は増加する見込み

この20年植物油生産量第1位の座にあるパーム油は、世界人口の増加、バイオ燃料の原料としての需要で今後も生産は増加。気候変動や戦争、円安など、輸入に依存する日本を取り巻く環境は厳しい。

植物油の生産は60年間で15倍以上に増加。今後も増加する見込み

1960年以来、植物油の生産量は年々増加しています。

植物油の生産量は1961年には約1600万トンでしたが、1980年代には4000万トン、2000年代には9000万トン、そして2022年には2億5000万トンと順調に伸び、60年前の15倍以上になっています。

生産量の増大の原因はいくつかありますが、ひとつは世界人口の増加による需要拡大です。

世界人口は1960年には30億人でしたが、2022年には80億人と3倍弱に増加しています。今後も日本など先進国は人口減少になりますが、アフリカなどは人口増加が続くので2080年には102億人に達すると予想されています。

また、2000年ごろからの急激な生産量の伸びは、新興国の経済発展により中国やインドなど人口の多い国で植物油が摂取できるようになり需要が上昇したと考えられます。

人口が増え、経済的に豊かになると、植物油の需要はますます増えてきます。【グラフ1】

今後の需要上昇に対応できるのはパーム油だけ

この60年間の生産量の伸びを見ると、当初は大豆油が第1位でしたが、2005年にパーム油が大豆油を抜くとその差は開く一方で、今では年間約2000万トンの差があります。【グラフ2】

パーム油の伸び方が著しいのは、単収の高さが大きな要因です。同じ面積でも、パーム油は大豆油の10倍、菜種油の6倍の生産量があります。つまり同じ量の植物油を作ろうとしたら、大豆油は10倍、菜種油は6倍の農園面積が必要です。

パーム油は、森林伐採の大きな誘因となり東南アジアの熱帯雨林に深刻な環境問題を起こしていますが、世界中の農園面積を比較するとアブラヤシは3000万ha、大豆は1億3400万haと大豆農園はアブラヤシ農園の約4倍もあります。大豆の大産地はブラジル、大豆農園はアマゾンの熱帯雨林が転換されているのです。

(参照P21 統計4-4)

現実的な視点でみると、今後植物油の大幅な増産が見込めるのはパーム油になるでしょう。

植物油のバイオディーゼル利用はこの10年で急成長

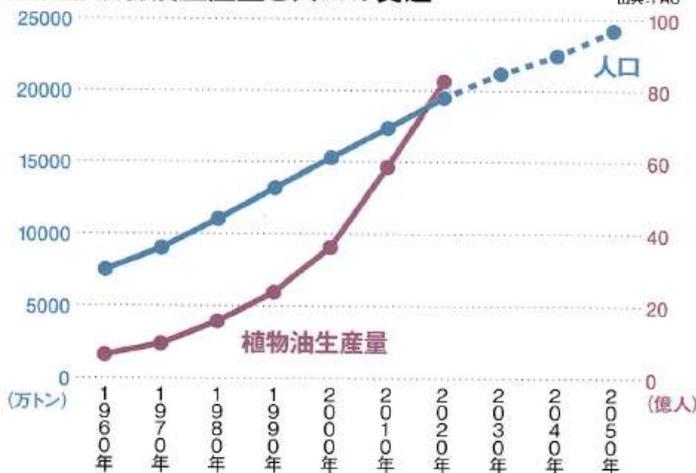
化石燃料の代替、再生可能エネルギーとしてバイオ燃料が注目されています。バイオ燃料の1種バイオディーゼルは軽油と混ぜて発電機やトラックなどの燃料に使われていますが、その主な原料は植物油です。

バイオディーゼルの生産量は2011年には2260万トンでしたが、2022年には5220万トンと10年ほどで2倍以上になっています。これは植物油生産量の約20%を占めています。

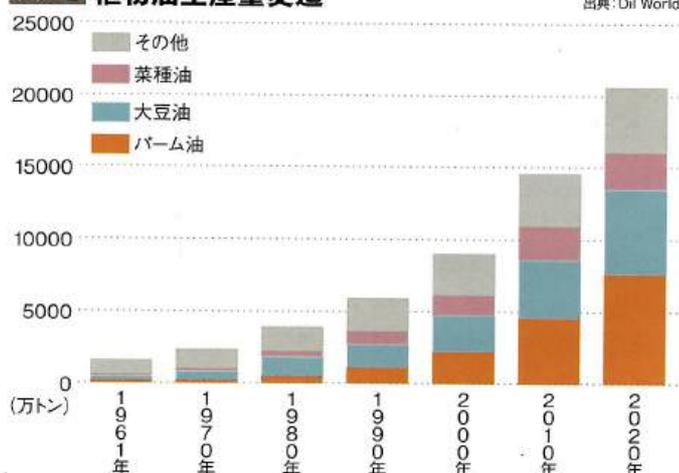
原料別にみると、2011年は大豆油、菜種油、パーム油の順でしたが、2022年にはパーム油、大豆油、菜種油の順になり、廃食油脂も大きく伸びています。中でもパーム油は542万トンから1872万トンと1330万トンも増えています。【グラフ3】

バイオディーゼルの原料は、各国の状

グラフ1 植物油生産量と人口の変遷

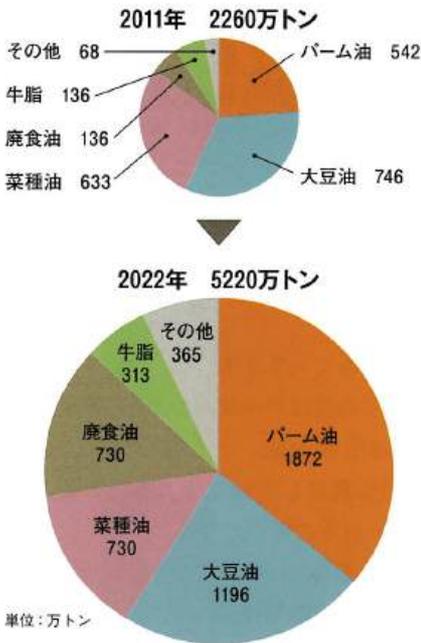


グラフ2 植物油生産量変遷



グラフ3 バイオ燃料の内訳

出典：日本植物油協会資料集より作成



況や世界情勢などによっても変わってきます。

早くからバイオディーゼル導入に熱心だったEUは、はじめは菜種油中心でしたが、生産量が増えるにしたがってパーム油を輸入するようになりました。しかし、パーム油が環境破壊の原因であり、また食料と競合するという批判を受け、燃料としてのパーム油の輸入は2030年に禁止することになりました。

ブラジルや米国は自国の生産量が多い大豆油を原料として使っています。

パーム油生産国のインドネシアやマレ

シアは、軽油に30%混ぜるなどバイオディーゼル使用を推進しています。

日本は、数年前パーム油発電のFIT申請が多かったのですが、RSPO認証パーム油を使うなどの条件をクリアできず、パーム油発電は下火になりました。日本のバイオディーゼルは廃食油が中心になっています。

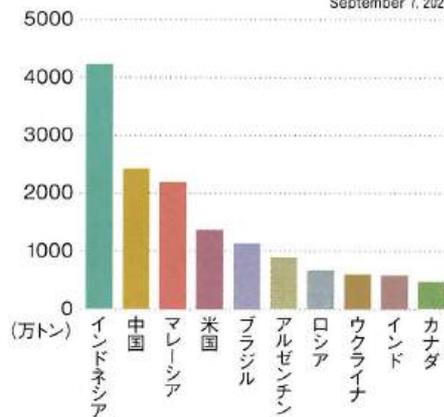
植物油の生産国は寡占化しており大量に輸出されるのはパーム油

世界ではさまざまな油脂が使用されていますが、植物油生産量を国別にみると、インドネシア、中国、マレーシア、米国、ブラジルです。【グラフ4】

インドネシアとマレーシアは両国でパーム油の生産量の86%を占めています。中国、米国、アルゼンチンは大豆油の生

グラフ4 国別 植物油生産量ランキング

出典：<https://www.insidermonkey.com/>
September 7, 2023



産量の58%を占めています。(参照P15 統計1-3)

このように生産国が集中していますから、油脂は国際的な取引が多くなります。戦争や内乱、気候変動、パンデミックが起きると、油脂の供給や運搬、そして価格に大きな影響がでることになります。

また、輸出量を見ると、2021年ではパーム油が5000万トン、大豆油が1400万トン、菜種油が600万トンとなっています。

パーム油は国際商品として重要な位置を占めています。

植物油を輸入に依存する日本を取り巻く環境は厳しい

2023年、日本の植物油消費量は282万トンでしたが、ここ数年全体量は少しずつ増えています。

消費量が多いのは、菜種油88万トン、パーム油67万トン、大豆油50万トンで、この3つで70%を占めています。

日本ではアブラヤシは育たないのでパーム油は全量輸入ですが、菜種も大豆もそのほとんどは輸入です。

コロナ禍のときのインドネシアの輸出規制、ウクライナや中東の戦乱に起因する輸送トラブル、世界的なコストアップ、そして急激な円安…輸入に依存する日本を取り巻く環境は厳しいといえるでしょう。

MSPOは新基準MSPO2.0を2025年1月に発効

アブラヤシ農園開発による熱帯雨林の減少問題、人権労働問題は1990年代から問題になり、解決の一助として「持続可能なパーム油のための円卓会議(RSPO)」が2004年に設立されました。RSPOはさまざまなセクターが参加する国際的な民間組織です。RSPO認証取得は小規模農家にとっては費用面、技術面でハードルが高くなかなか進みませんでした。

2014年、マレーシアは、国として持続可能なパーム油の生産に取り組む Malaysian Sustainable Palm Oil (MSPO) を立ち上げました。

MSPOの対象は、独立小規模農家、組織化された小規模農家、プランテーション

ン、パーム油加工施設などで、それぞれに基準が設けられていますが、いずれも認証を取るにあたっては国の支援がありません。中でも小規模農家に対しては、生産性を上げる技術支援、農業や肥料の費用負担、認証にかかる費用の支援など手厚い支援を行っています。2019年にはMSPO認証取得を義務化し、2024年には認証取得率は87.4%となっています。

当初は、MSPOの基準はRSPOと比較して曖昧で緩いと指摘され、国際的な評価は決して高いとはいえませんでした。MSPOも「現在、認証された持続可能なパーム油の需要は限られています」と認めており、認証油として付加価値をつけ

ることを目指しています。

そこでMSPOは、HCV、SIA、EIA*に配慮した「MSPO基準2.0」を発効させました。以前と違う点は「自然林や保護地域、HCVはアブラヤシ農園に転換しない」と明記しています。当初は「成人の監督下で教育に支障がない場合は家族農場での児童労働を認める」としていましたが、「子どもは雇用搾取されてはいけません」と明記するなど労働面でも改善がなされています。

また、MSPOは当初サプライチェーン認証がないことも指摘されていましたが、2024年バイオマスのPKSとパーム幹のCoC認証文書を発行しました。

*HCV(高い保全価値)、SIA(社会的影響評価)、EIA(環境影響評価)

日本の消費財大手企業18社のRSPO 認証油導入の進捗状況を調べました

RSPOが設立されて20年。日本は加盟企業数は多いけれど、認証油の導入が遅い、フィジカルな認証油(MB以上)が少ないといわれてきました。ACOPレポートからこの2年間の認証油導入の進捗状況を見ていきましょう。

ACOPレポートは、RSPO会員が毎年提出することを課せられている年間報告書で、ここではパーム油関連品の使用量、グレード別の認証品の購入量を調べました。ただし、報告書の内容は企業が提出されたまま掲載され、RSPOはチェックしていません。

ここでは、消費者にとって身近な大手消費財メーカー、パーソナルケア企業6社、食品企業12社について、ACOPレポート2024を調べてみました。2年間の進捗はACOPレポート2022と比較して2年間の進捗を見ました。ACOPレポート2022は2021年の実績、2024は2023年の実績になります。

パーソナルケア企業

ACOPレポート2024で、パーム油関連品の使用量が多い順に花王(株)、太陽油脂(株)、ライオン(株)、(株)ファイントゥデイ、サラヤ(株)、資生堂(株)の6社についてみていきます。

どの社も派生品を使用していますが、パーム油、核油を利用している社もあり

ます。各社の詳細はP9をご覧ください。

6社全体のパーム油関連使用量は52.7万トン、認証量は22.4万トンで、認証率は2年前から伸びています。ただ花王が認証パーム油(B&C)を使用量を大幅に上回る10.8万トン購入しているのも、単純に認証率を比較してもあまり意味はないでしょう。パーム油認証率は311%ですが、これも同様でしょう。

核油の使用量は14万トン、認証率は19%で、MBが中心です。使用量、認証率とも2022から減少しています。

使用量が多い派生品は34.5万トンで認証率は23%と、9%下がっています。グレードはMBです。

食品企業

ACOPレポート2024で、パーム油関連品の使用量が多い順に日清食品(株)、東洋水産(株)、カルビー(株)、ヤマザキ製パン(株)、味の素(株)、(株)ロツテ、(株)明治、森永製菓(株)、(株)ブルボン、江崎グリコ(株)、敷島製パン(株)、エスビー食品(株)の12社に

ついてみていきます。

多くの社はパーム油のみを使用していますが、味の素、ロツテ、明治は派生品なども利用しています。各社の詳細はP10~11をご覧ください。

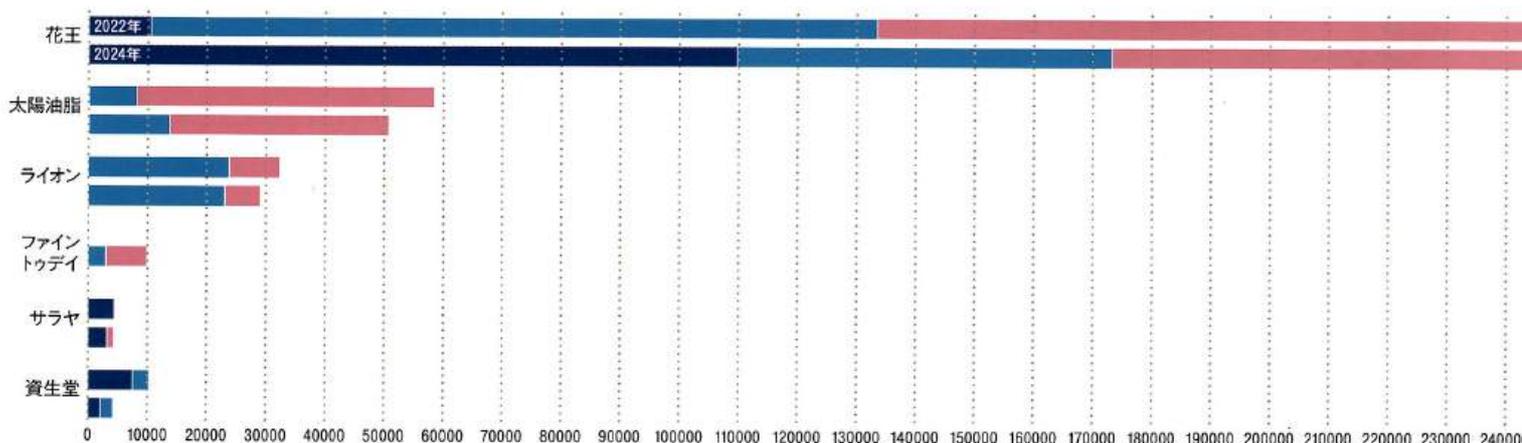
12社全体のパーム関連使用量は46万トンで、認証率は52%で、7%伸びています。

使用量が32.9万トンのパーム油については、認証率が60%になり、9%伸びています。グレードも2022ではB&Cが40%を占めていましたが、2024はB&Cはかなり減り、MB62%、SG36%とフィジカルな認証油への切り替えが進んでいます。

核油の使用量は1.8万トン、認証率は19%で、4%下がっています。グレードはMBです。

派生品は8.3万トンで認証率は23%と、20%伸びています。グレードはMBです。パーム油の使用が多い食品企業は、この2年間で認証率は伸び、フィジカルな認証油への切り替えが確実に進んでいるといえるでしょう。

パーソナル企業6社のパーム関連品使用総量(認証品/非認証品) 上:ACOPレポート2022



1位 花王(株)

2007年加盟

使用総量は42.8万トンで日本企業の中では突出した量。認証率40%は2年前より14%上昇。使用量はパーム油0.6万トン、核油13万トン、派生品29.2万トン。パーム油のB&C大量購入は、インドネシアでの小農支援プロジェクトの一環と考えられる。認証率は核油19%、派生品13%。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	0	108103	54	1554	10486	0
MB	0	1138	51625	23041	71295	39392
SG	0	0	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

3位 ライオン(株)

2006年加盟

使用総量は3万トンで2年前より若干減少。使用しているのは派生品のみ。認証品の購入量は変わってないので、認証率は74%から80%に上がっている。認証グレードはMBが進められている。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	0	0	0	0	0	0
MB	0	0	0	0	23827	23089
SG	0	0	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

5位 サラヤ(株)

2005年加盟

使用総量は約4500トンで2年前とほぼ同じ。使用しているのは派生品が3000トン、核油が1000トン、パーム油。認証率は100%から74%に下降。認証でB&Cの割合が多いのは、企業方針として小農支援を行っていると考えられる。RSPOマーク付きの商品を販売。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	9	6	1068	757	3381	2398
MB	0	0	10	0	0	20
SG	14	15	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

2位 太陽油脂(株)

2011年加盟

使用総量は5万トンで2年前より8000トン減少。使用しているのはパーム油3.2万トン、核油1.2万トン、派生品6000トン、全体の認証率は14%から27%に上昇。派生品の認証率は85%だが、核油は13%に留まっている。認証はMBが中心、RSPOマーク付きの商品を販売。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	8	11	81	69	0	0
MB	4351	9782	1433	1572	2254	5582
SG	9	0	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

4位 (株)ファイントウデイHD

2023年加盟

資生堂からパーソナルケア事業を引き継いで創業し、2022年にRSPOに加盟したため2年前のデータはない。使用総量は約1万トンで、使用しているのは派生品のみ。認証率は30%。認証グレードはMBのみ。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	—	0	—	0	—	0
MB	—	0	—	0	—	2973
SG	—	0	—	0	—	0
IP	—	0	—	0	—	0

6位 資生堂(株)

2010年加盟

使用総量は4200トンで2年前から半減した。これはパーソナルケア事業をファイントウデイに引き継いだためとみられる。使用しているのはパーム油と派生品。認証率は2年前と同様で100%。2年前はB&Cが多かったが、MBへの切り替えが進んでいる。

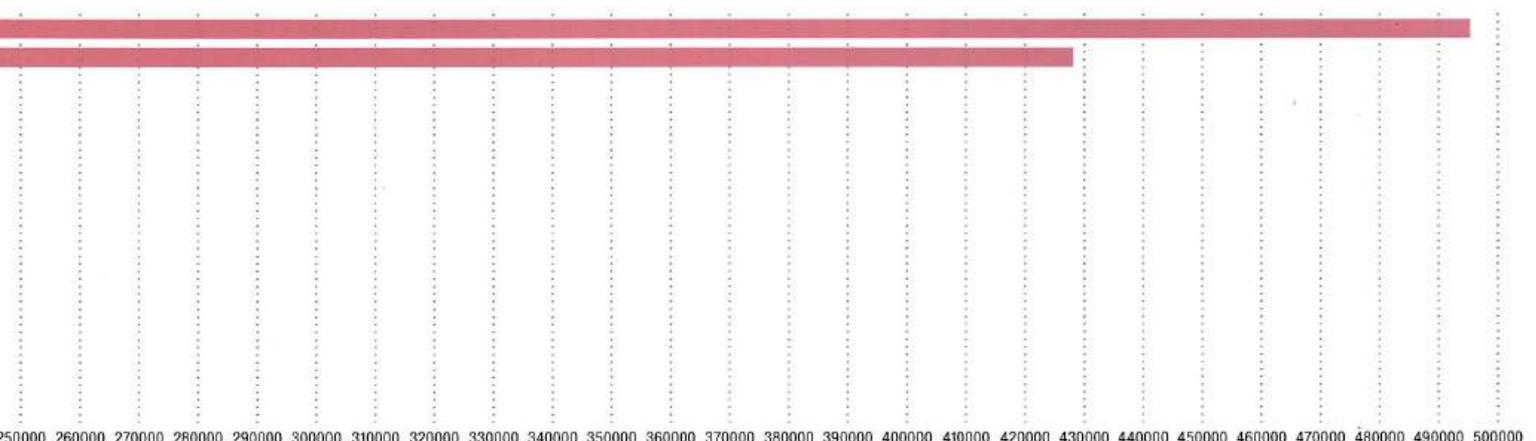
認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	5	0	0	0	7568	2091
MB	13	20	0	0	2746	2154
SG	0	0	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

下: ACOPLレポート2024

単位: トン

■ B&C ■ MB ■ SG ■ IP ■ 非認証油



1位 日清食品(株)

2013年加盟

使用しているのはパーム油のみ、総量は2年前から約7万トン増加の20万トンで、食品メーカー第1位。認証率は36%から47%に上昇。B&C、MB、SGとも増加しているが、MBは1万トンの伸び。SGも4700トンで1.5倍になっている。RSPOマーク付きの商品もある。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	36	150	0	0	0	0
MB	45000	55900	0	0	0	0
SG	3002	4700	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

3位 カルビー(株)

2017年加盟

使用しているのはパーム油のみ、総量は2年前から1.5万トン増加し、5.6万トン。認証率は69%で前回より下がっているが、認証油は5万トンで1万トン増えている。2年前はB&Cが多かったが、今回はMBが4万トンと切り替えが進んでいる。RSPOマーク付きの商品を販売。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	22552	7146	0	0	0	0
MB	18803	42941	0	0	0	0
SG	0	0	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

5位 味の素(株)

2012年加盟

使用しているのはパーム油2.5万トン、核油1万トン、派生品で総量は3.7万トン、2年前から微増。認証率は35%から31%へ。パーム油の認証グレードはMBが中心。核油、派生品の認証品への切り替えは苦戦している。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	3	3	0	0	0	0
MB	9723	10509	2013	125	312	11
SG	360	503	7	0.12	305	193
IP	0	0	0	0	0	0

2位 東洋水産(株)

2015年加盟

使用しているのはパーム油のみ、総量は2年前から約1万トン増加の8万トンで食品メーカー第2位。認証油は1.2万トン増加し、認証率は77%から83%に上昇した。認証グレードも、2年前はB&Cが70%だったが、現在はSGに切り替えられている。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	44400	0	0	0	0	0
MB	12100	0	0	0	0	0
SG	0	68000	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

4位 ヤマザキ製パン(株)

2020年加盟

使用しているのは派生品のみ、総量は5.5万トンで、2年前より3000トン増えている。認証品は派生品のMBで、2年前の24トンから94トンになったが、全体から見ると少量で、認証率は限りなく低いといえる。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	0	0	0	0	0	0
MB	0	0	0	0	24	94
SG	0	0	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

6位 (株) ロッテ

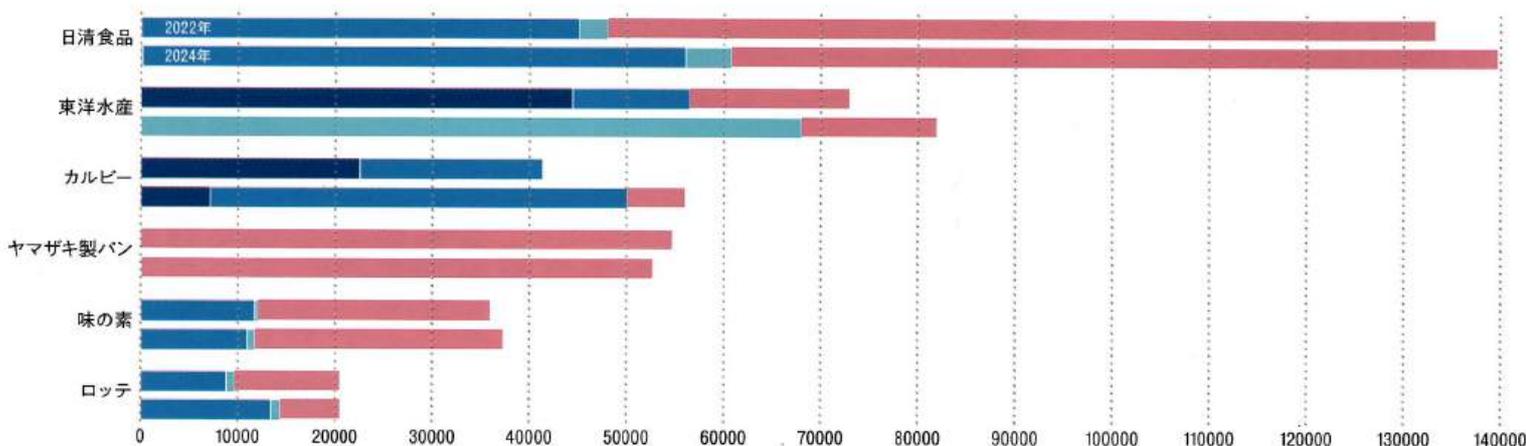
2019年加盟

使用総量は2万トンで2年前とほぼ同じ。2年前は派生品だけ使用していたが、現在はパーム油や核油も少量使用するようになった。派生品の認証グレードはMB中心で4000トン増加し、認証率は22%から70%に急上昇した。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	0	0	0	0	0	0
MB	0	703	0	0	8821	12700
SG	0	983	0	0	861	0
IP	0	0	0	0	0	0

食品企業12社のパーム関連品使用総量(認証品/非認証品) 上:ACOPレポート2022 下:ACO



7位 (株) 明治

2016年加盟

使用総量は2万トンで2年前とほぼ同じ。使用しているのはパーム油1.1万トン、派生品0.7万トン、核油。認証率は79%から99.5%とほぼ100%に達している。認証品はB&Cがごく少量あるが、ほとんどがMBに切り替えられている。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	82	17	0	0	0	0
MB	8626	11348	820	1126	6553	6923
SG	0	0	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

8位 森永製菓(株)

2019年加盟

使用総量は1.2万トンで2年前と変わらず、使用しているのもパーム油のみ。認証率は2年前にはほぼ0だったが、46%に上がってきた。認証品はMBのみ。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	0	0	0	0	0	0
MB	50	5766	0	0	0	0
SG	0	0	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

9位 (株) ブルボン

2019年加盟

使用総量は1.2万トンで2年前から微増。使用しているのはパーム油0.9万トン、核油0.2万トン。認証率は0.5%から13%になった。認証はパーム油はMBで進めているが、核油にはまだ手付かず。RSPOマーク付きの商品を販売。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	2022	2024	2022	2024	2022	2024
MB	0	0	0	0	0	0
SG	515	1548	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

10位 江崎グリコ(株)

2019年加盟

使用総量は1.1万トンで2年前から1万トン減少している。使用しているのはパーム油と核油。非認証パーム油の使用量が半減したためか、認証率は8%から37%に上がっている。認証はパーム油、核油ともMBで進められている。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	0	49	0	0	0	0
MB	572	2504	1149	1647	0	0
SG	0	0	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

11位 敷島製パン(株)

*RSPOの名簿では、
パスコ敷島製パン

2022年加盟

RSPO加盟が2022年なので、2年前のデータはない。使用総量は8800万トンで、使用しているのは派生品のみ。認証品はMBで、認証率は6%。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	—	0	—	0	—	0
MB	—	0	—	0	—	540
SG	—	0	—	0	—	0
IP	—	0	—	0	—	0

12位 エスピー食品(株)

2017年加盟

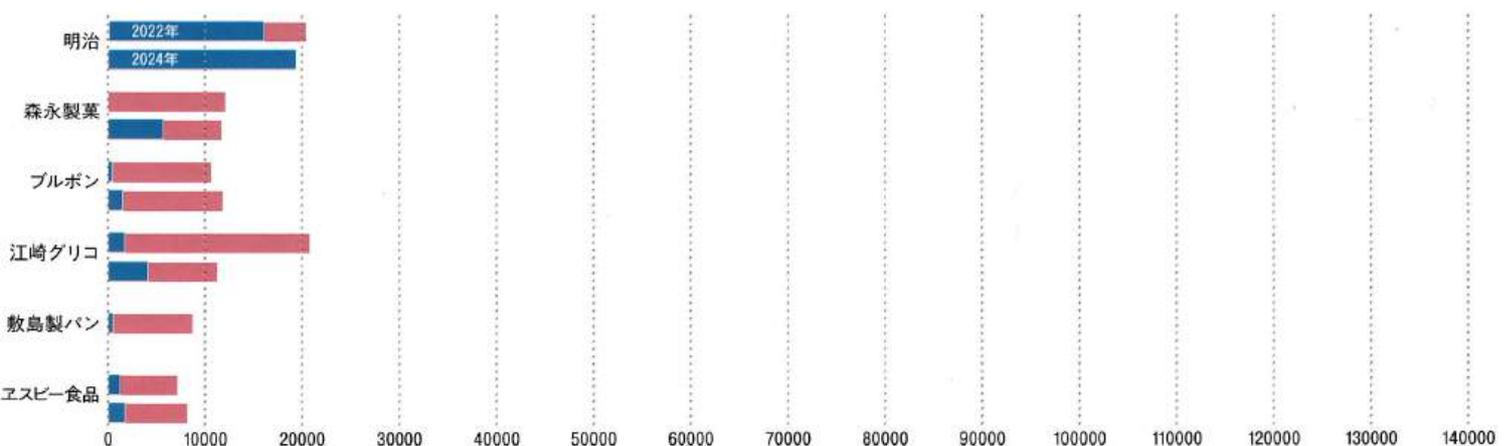
使用総量は約8000トンで、2年前より1000トン増加。使用しているのはパーム油のみ。認証率は17%から27%に伸びた。認証はMBで進められている。

認証油のグレード変遷

	パーム油		パーム核油		派生品	
	2022	2024	2022	2024	2022	2024
B&C	2	0	0	0	0	0
MB	1258	1736	0	0	0	0
SG	0	0	0	0	0	0
IP	0	0	0	0	0	0

レポート2024 単位: トン

■ B&C ■ MB ■ SG ■ IP ■ 非認証油



日本企業のRSPO正会員は148社、準会員は181社と増加を続けています

パーム油関連品の取り扱い量が500トン以上の企業は正会員、500トン未満の企業は準会員になります。

金融機関やNGOはパーム油関連品の取扱いはありませんが正会員になります。このリストは2025年1月3日時点のものです。

正会員 Ordinary Member

消費財メーカー

(株)アイセロ/アサヒグループHD(株)/味の素(株)/UHA味覚糖(株)/江崎グリコ(株)/S&Bエスビー食品(株)/花王(株)/カゴメ(株)/(株)亀田製菓/カルビー(株)/川口産業(株)/キューピー(株)/キリンHD(株)/(株)コーセー/小林製薬(株)/(株)コープクリン/堺化学工業(株)/サラヤ(株)/(株)資生堂/ジェイオーコスメティック(株)/スジャータめいらく(株)/(株)ダイセル/太陽油脂(株)/タカナシ乳業(株)/玉の肌石鹸(株)/当栄ケミカル(株)/東洋水産(株)/(株)ニイタカ/(株)ニチレイ/(株)ニッスイ/日新化工(株)/日清食品HD(株)/日世(株)/日本コルマー(株)^{*1}/ハウス食品グループ本社(株)/パスコ敷島製パン^{*2}/(株)b-ex/ビジョン(株)/日本ハム(株)/(株)ファイントウデイHD/フジバングループ本社(株)/(株)不二家/(株)ブルボン/(株)ペリカン石鹸/(株)ポーラ・オルビスHD/(株)北海道フーズ/(株)ポテトフード/マリンフード(株)/マルハニチロ(株)/(株)マスター/(株)マンダム/ミマスクリーニング(株)/(株)ミルボン/(株)明治HD/森永製菓(株)/森永乳業(株)/山崎製パン(株)/山芳製

菓(株)/有楽製菓(株)/雪印メグミルク(株)/ライオン(株)/リボン食品(株)/(株)ロッテ/ロート製薬(株)

加工流通業

青木油脂工業(株)/アーク(株)/(株)ADEKA/伊藤忠商事(株)/岩瀬コスファ(株)/岩谷産業(株)/植田製油(株)/AGC(株)/(株)エスケム/太田油脂(株)/オレオトレード・インターナショナル(株)/(株)カネカ/カネダ(株)/川研ファインケミカル(株)/喜多組商事(株)/木村産業(株)/清田産業(株)/研光通商(株)/高級アルコール工業(株)/合同酒精(株)オノエグループ/興和(株)/小倉合成工業(株)/(株)小桜商会/小松屋(株)/(株)コンフィテラ/幸商事(株)/阪本薬品工業(株)/(株)サンエース/三洋化成工業(株)/(株)J-オイルミルズ/正栄食品工業(株)/昭栄薬品(株)/昭和産業(株)/新日本理化(株)/住友商事(株)/ゼロワットパワー(株)/第一工業製薬(株)/太陽化学(株)/高砂香料工業(株)/(株)中国リス食品販売/月島食品工業(株)/築野食品工業(株)/テイカ(株)/東信化学(株)/東洋合成工業(株)/豊田通商(株)/長

瀬産業(株)/日油(株)/日華化学(株)/日光ケミカルズ(株)/日清オイリオグループ(株)/日本サーファクタント工業(株)/(株)日本触媒/日本食品(株)/(株)日本発電工業/(株)日本ファインケム/Nebio SUPER電力(株)/長谷川香料(株)/汎アジア貿易(株)/不二製油グループ本社(株)/富士通商(株)/(株)ブルーキャピタルマネージメント/保土谷化学工業(株)/丸善石油化学(株)/丸善薬品産業(株)/丸紅(株)/三木産業(株)/三井化学(株)/三井物産(株)/三菱化学(株)/三菱商事(株)/ミヨシ油脂(株)/横関油脂工業(株)/ラクトジャパン(株)/(株)ラデッシュ・ソリューション/理研ビタミン(株)/LOPS(株)

小売業

イオン(株)/(株)セブン&アイ・ホールディングス/日本生活協同組合連合会/パルシステム生活協同組合/(株)ゼンショーホールディングス

環境/自然保護NGO

認定NPO法人 ボルネオ保全トラスト・ジャパン

準会員 Supply Chain Associate Member

(株)アイエヌイー/ト・T・O(株)/旭化成ファインケム(株)/アステナホールディングス(株)/天野エンザイム(株)/アルプス薬品工業(株)/安藤バラクニー(株)/イエナ商事(株)/池田糖化工業(株)/池田物産(株)/石原産業(株)/稲垣薬品興業(株)/(株)伊那貿易商会/イヌイ(株)/(株)乾工業所/今中(株)/(株)岩田商会/INCHEMY CHIBA(株)/宇津商事(株)/(株)永廣堂本店/永和ホールディングス(株)/NS ファーファ・ジャパン(株)/(有)エムコ食品/MP五協フード&ケミカル(株)/(株)OSPホールディングス/オーケム通商(株)/(株)オーケム/大阪油脂工業(株)/岡畑産業(株)/(株)オリエンタルランド/化成産品(株)/加藤産業(株)/兼松ケミカル(株)/ガラムエンタープライズ(株)/川原石油化学(株)/紀伊産業(株)/KJISCO(株)/木曾産業(株)/北沢産業(株)/共栄社化学(株)/協和香料興産(株)/久木田化学工業(株)/(株)クラウン・パッケージ/(株)クラブコスメティックス/(株)クラレ/Credo Unite Co., Ltd./ケアイケミカル(株)/研三商事(株)/広栄工業(株)/宏輝(株)/(株)光洋商会/交洋ファインケミカル(株)/交洋貿易(株)/国分グループ(株)/コーケンフード&フレイバー(株)/(株)コスメナチュラールズ/寿貿易/小西安(株)/桜井食品(株)/THE SAKURA GREEN

(株)/佐々木化学(株)/(株)サノ/三栄源エフ・エフ・アイ(株)/三光(株)/三洲食研(株)/三晶(株)/(株)サン・ダイコー/サン・パシフィック・エンタープライズ(株)/(株)三陽商会/三和油脂興業(株)/(株)ジェーシー通商/(株)JTB商事/(株)GSIクレオス/(株)シバハシケミファ/渋谷油脂(株)/島貿易(株)/昭光通商(株)/昭和興産(株)/白石工業(株)/信越化学工業(株)/新日本ケミカル(株)/生活クラブ連合会/セイワサプライ(株)/(株)成和化成/Save the Ocean(株)/セティ(株)/センス&トリクス(株)/(株)創健社/ソーダニッカ(株)/ダイキン工業(株)/大東化成工業(株)/大同化成工業(株)/大日精化工業(株)/大保香料(株)/太平洋化学産業(株)/高田香料(株)/(株)立花商店/チタン工業(株)/(株)地の塩社/千葉製粉(株)/蝶理(株)/ティックファイン(株)/(株)デイリー・インポート/(株)テクノーブル/テムライト(株)/東亜化成(株)/東海油化学商事(株)/東北化学薬品(株)/東洋化学(株)/東洋サイエンス(株)/東洋ナッツ食品(株)/トーアス(株)/トーエー食品(株)/(株)トキワ/トビー工業(株)/中沢乳業(株)/中日本カプセル(株)/友栄食品興行(株)/ナショナル美松(株)/(株)ナンバーズリー/西野金穂(株)/日弘ビックス(株)/日産化学(株)/日進化成(株)/(株)日

東物産商事/日本板硝子(株)/日本エマルジョン(株)/日本光研工業(株)/日本コーンスターチ(株)/(株)ネイチャーズウェイ/(株)ネオスラボラトリー/(株)ネクスト・イノベーション/BIO ACTIVES JAPAN(株)/林六(株)/(株)パシフィック・プロダクツ/比果産業(株)/日比忠(株)/(株)ビューティ・テック/フィグラ(株)/富士化学工業(株)/不二化成(株)/フジサワ化成(株)/藤本化学製品(株)/ベンチャーケミカル(株)/豊国製油(株)/ホシケミカルズ(株)/ボッカサッポロフード&ビバレッジ(株)/(株)ホテイフーズ/本城化成(株)/(株)マツモト交商/松林工業薬品(株)/松山油脂(株)/丸一化成(株)/(株)マルキチ/丸善製薬(株)/(株)ミカ食品/(株)ミロット/三谷産業(株)/(株)雅化成/三好化成(株)/(株)武蔵野化学研究所/陸物産(株)/明光化学(株)/(株)メディプラス製薬/森下産業(株)/森下仁丹(株)/(株)ヤクルト本社/山川貿易(株)/(株)ヤマグチマイカ/山本通産(株)/油化産業(株)/油脂製品(株)/ユニオン商事(株)/(株)ユノス/ユニ・チャーム(株)/ユニバーサル・デタージェント(株)/リードケミカル(株)/(有)リンデン/(株)ロバパン/綿半トレーディング(株)/Watanabe Chemical(株)

*1 TOA(株)に社名変更
*2 正式名称は敷島パン(株)

Part 2

統計編

CONTENTS-2

統計1

世界の油脂事情…P14～P15

- 統計1-1 主要17油脂別生産量
- 統計1-2 5大植物油生産量変遷
- 統計1-3 5大植物油生産国ランキング
- 統計1-4 油糧作物別単収変遷

統計2

パーム油…P16～P17

- 統計2-1 パーム油の国別生産量
- 統計2-2 パーム油の国別消費量
- 統計2-3 パーム油の国別輸出量
- 統計2-4 パーム油の国別輸入量

統計3

パーム核油…P18～P19

- 統計3-1 パーム核油の国別生産量
- 統計3-2 パーム核油の国別消費量
- 統計3-3 パーム核油の国別輸出量
- 統計3-4 パーム核油の国別輸入量

統計4

アブラヤシ栽培面積の変遷…P20～P21

- 統計4-1 国別アブラヤシ収穫可能面積・単収
- 統計4-2 インドネシアとマレーシアのアブラヤシ栽培面積変遷
- 統計4-3 マレーシアの州別アブラヤシ栽培面積変遷
- 統計4-4 大豆とアブラヤシの栽培可能面積変遷

統計5

日本…P22

- 統計5-1 日本の油脂別消費量
- 統計5-2 植物油・大豆の輸入価格

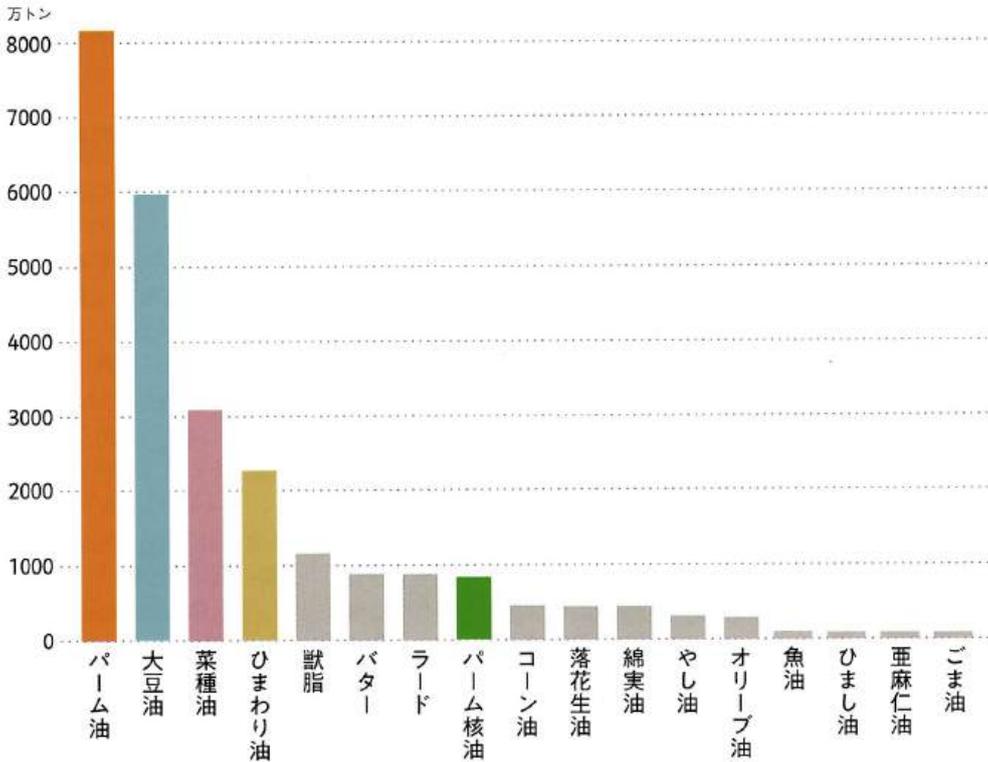
緑の回廊プロジェクト…P23

統計 1 世界の油脂事情

統計 1-1 主要17油脂別生産量(2023)

Source : Oil World Annual 2024

総量は昨年と比べて1000万トン増加した。パーム油は初の8000万トン越え。パーム油と大豆油、菜種油で全体の67%を占める。



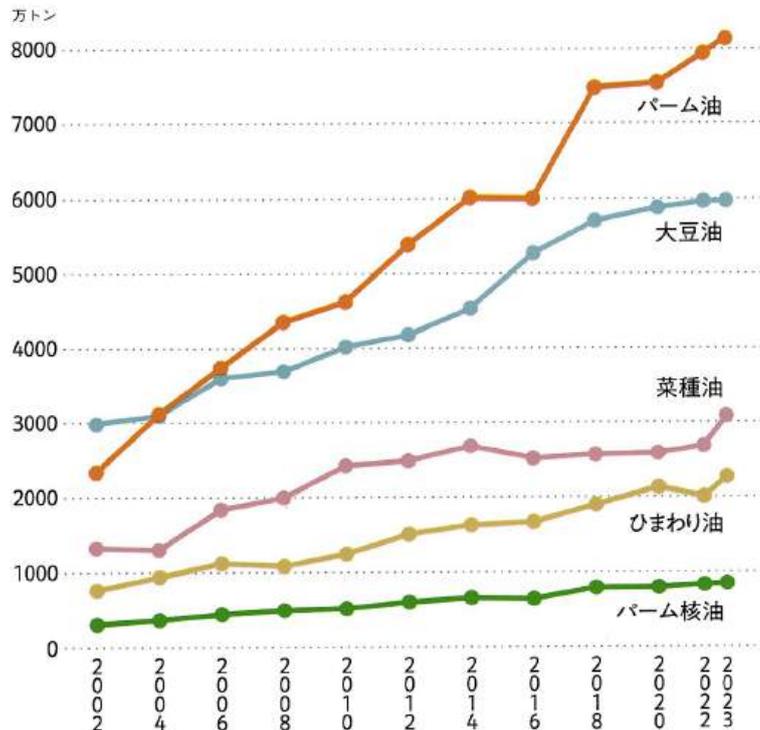
単位: 万トン

種類	生産量
パーム油	8159.4
大豆油	5962.1
菜種油	3093.6
ひまわり油	2267.4
獣脂	1168.4
バター	889.0
ラード	884.1
パーム核油	842.8
コーン油	461.7
落花生油	444.4
綿実油	444.1
やし油	313.7
オリーブ油	288.9
魚油	101.3
ひまし油	89.5
亜麻仁油	87.7
ごま油	84.2
合計	25582.4

統計 1-2 5大植物油生産量変遷

Source : Oil World Annual 2003-2024

パーム油は2002年からずっと順調に増加している。大豆油は前年より減っているが、3位の菜種油とは大きな差がある。



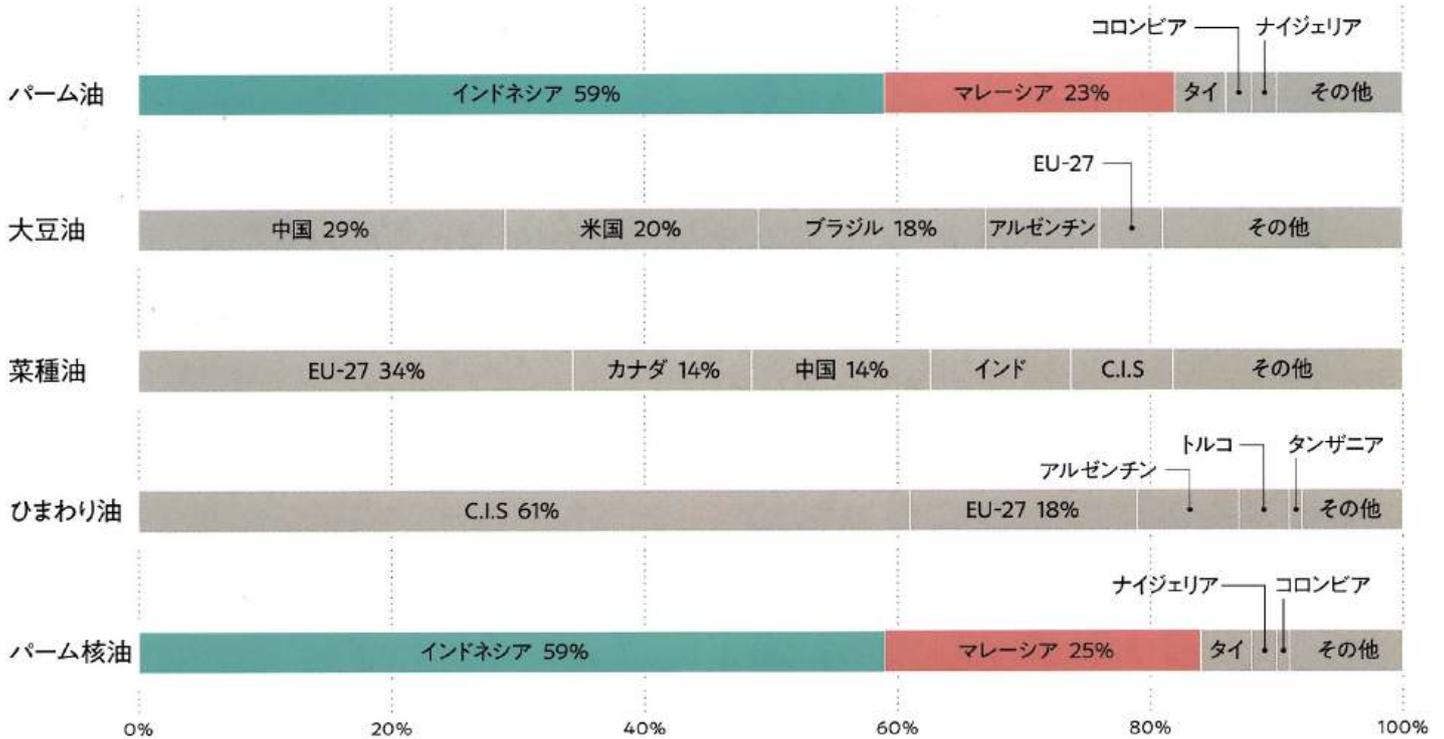
単位: 万トン

	パーム油	大豆油	ひまわり油	菜種油	パーム核油
2002	2340.7	2985	1334.3	761.0	304.4
2004	3117.8	3089.1	1309.2	940.1	361.2
2006	3741.5	3591.6	1844.6	1121.7	436.5
2008	4355.0	3680.8	2003.6	1084.5	489.4
2010	4624.5	4010.4	2425.9	1245.5	510.5
2012	5396.4	4170.2	2492.7	1506.2	594.0
2014	6016.8	4525.0	2688.6	1626.6	650.9
2016	6006.2	5265.7	2522.5	1666.2	636.2
2018	7481.9	5698.4	2571.6	1895.7	783.1
2020	7547.8	5871.6	2591.6	2128.3	788.2
2022	7941.6	5957.0	2689.9	2005.6	823.5
2023	8159.4	5962.1	3093.6	2267.4	842.8

統計 1-3 5大植物油生産国ランキング

Source : Oil World Annual 2024

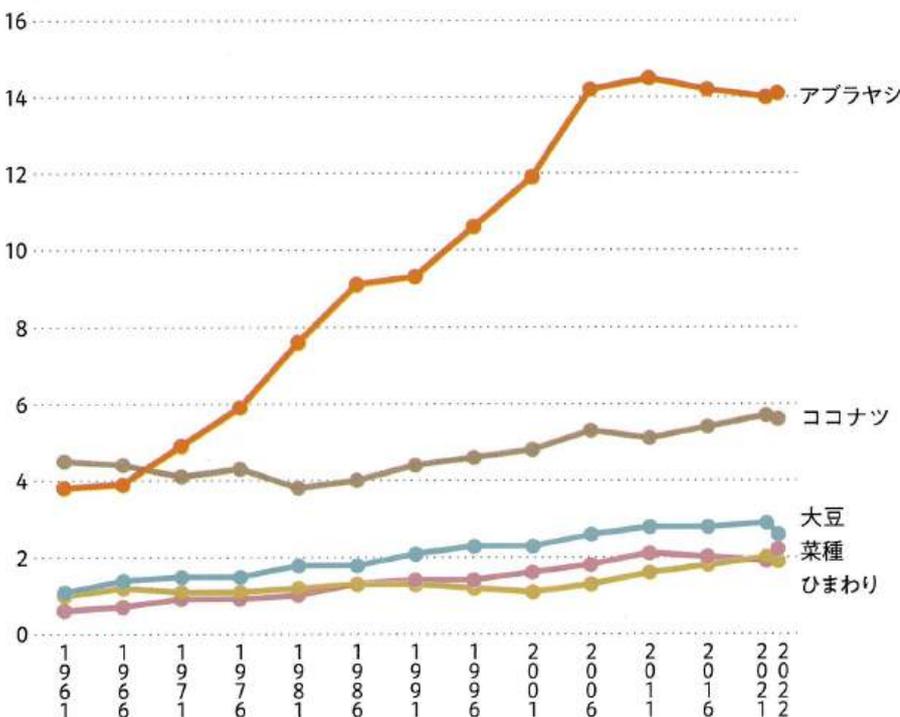
5大植物油はいずれも少数の国で生産の大部分を占めている。ウクライナはC.I.Sから離脱しているが、この統計ではC.I.Sに含まれている。



統計 1-4 油量作物別単収変遷

FAOSTAT 2024/10/24 閲覧

トン/ヘクタール



含油率はアブラヤシが25%、大豆が29%、菜種が40%といわれている。油に換算すると、パーム油は大豆油の5倍、菜種油の4倍の量になる。

単位: トン/ヘクタール

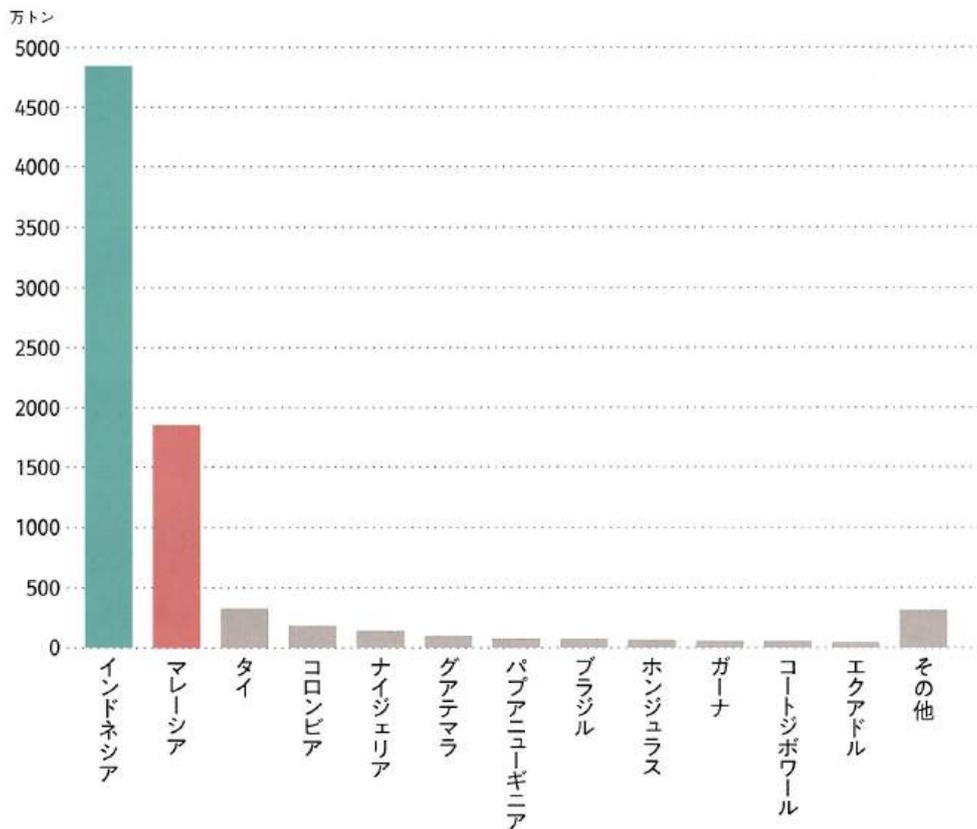
	アブラヤシ	ココナツ	大豆	ひまわり	菜種
1961	3.8	4.5	1.1	1.0	0.6
1966	3.9	4.4	1.4	1.2	0.7
1971	4.9	4.1	1.5	1.1	0.9
1976	5.9	4.3	1.5	1.1	0.9
1981	7.6	3.8	1.8	1.2	1.0
1986	9.1	4.0	1.8	1.3	1.3
1991	9.3	4.4	2.1	1.3	1.4
1996	10.6	4.6	2.3	1.2	1.4
2001	11.9	4.8	2.3	1.1	1.6
2006	14.2	5.3	2.6	1.3	1.8
2011	14.5	5.1	2.8	1.6	2.1
2016	14.2	5.4	2.8	1.8	2.0
2021	14.0	5.7	2.9	2.0	1.9
2022	14.1	5.6	2.6	1.9	2.2

統計 2 パーム油

統計 2-1 パーム油の国別生産量(2023)

Source : Oil World Annual 2024

インドネシアとマレーシアの2か国で全体の85%を占める。インドネシアは昨年と比して200万トン増えているが、マレーシアはほとんど変化がなく、両国の生産量の差が開く一方である。



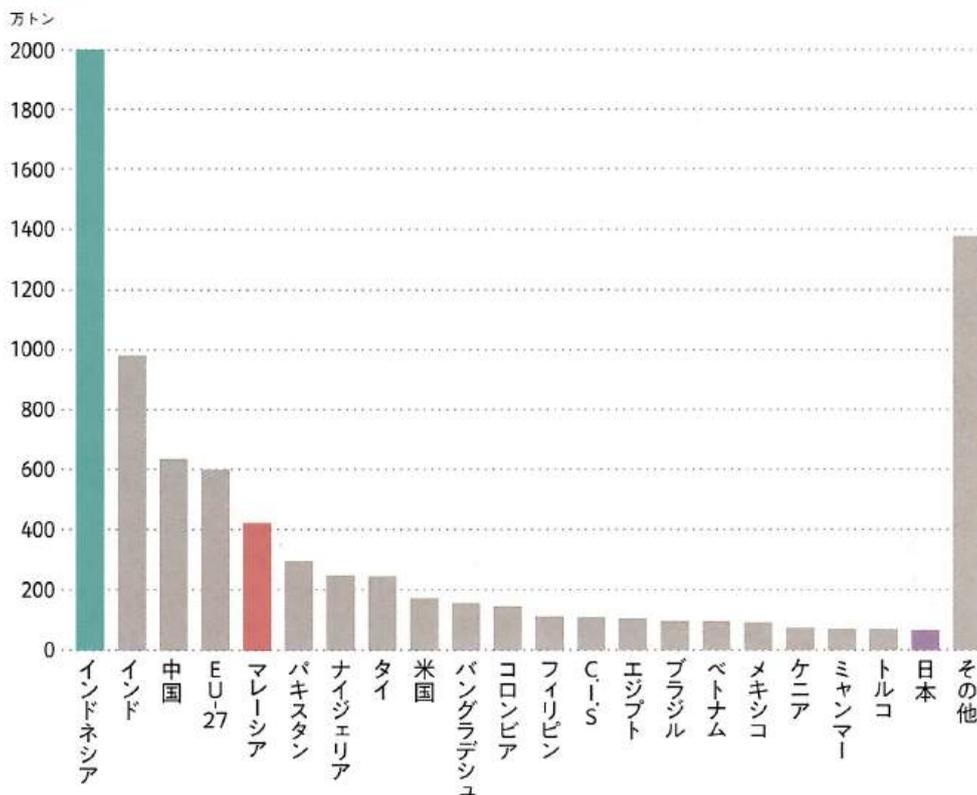
単位: 万トン

国名	生産量
インドネシア	4843.0
マレーシア	1855.2
タイ	331.0
コロンビア	184.2
ナイジェリア	146.0
グアテマラ	103.0
パプアニューギニア	77.0
ブラジル	73.0
ホンジュラス	67.0
ガーナ	59.0
コートジボワール	59.0
エクアドル	47.2
その他	314.8
合計	8159.4

統計 2-2 パーム油の国別消費量(2023)

Source : Oil World Annual 2024

昨年と比べると、1位、2位のインドネシア、インドは100万トンずつ消費量が増。中国は300万トン増加し、3位になった。日本は67万トンで微増。

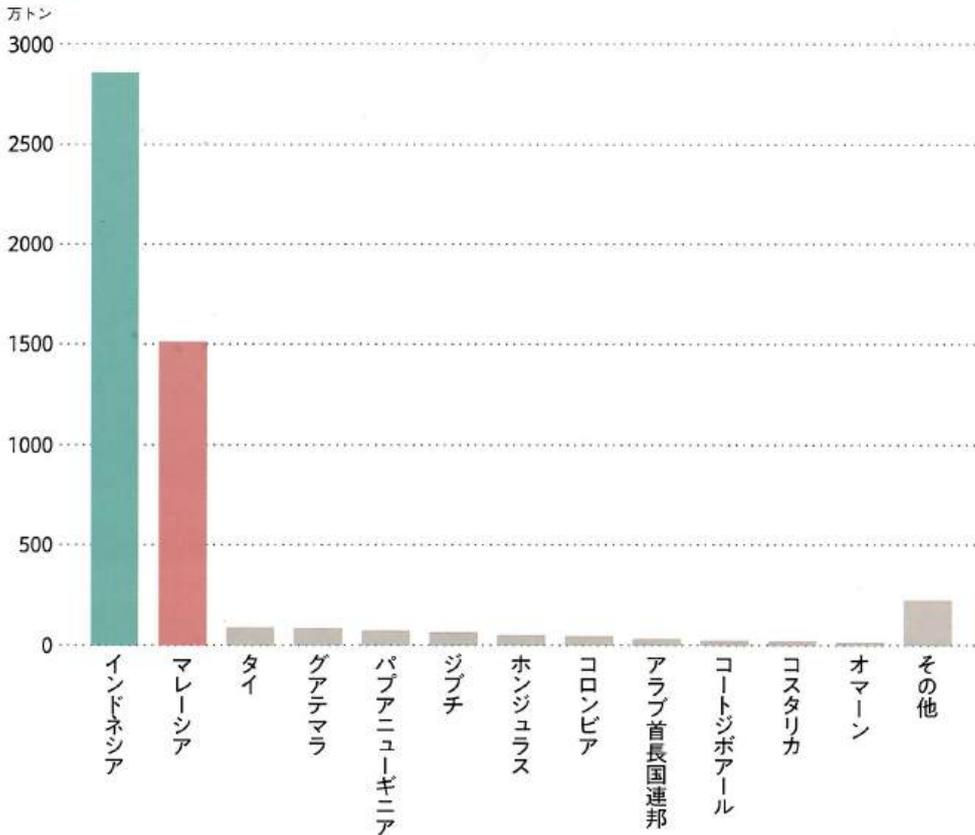


単位: 万トン

国名	消費量
インドネシア	2000.7
インド	981.6
中国	636.4
EU-27	600.0
マレーシア	422.3
パキスタン	298.1
ナイジェリア	249.7
タイ	245.7
米国	173.7
バングラデシュ	157.0
コロンビア	146.0
フィリピン	113.1
C.I.S	110.8
エジプト	107.2
ブラジル	97.6
ベトナム	96.8
メキシコ	93.0
ケニア	74.4
ミャンマー	70.3
トルコ	69.3
日本	66.9
その他	1378.4
合計	8188.6

統計 2-3 パーム油の国別輸出量(2023)

Source : Oil World Annual 2024



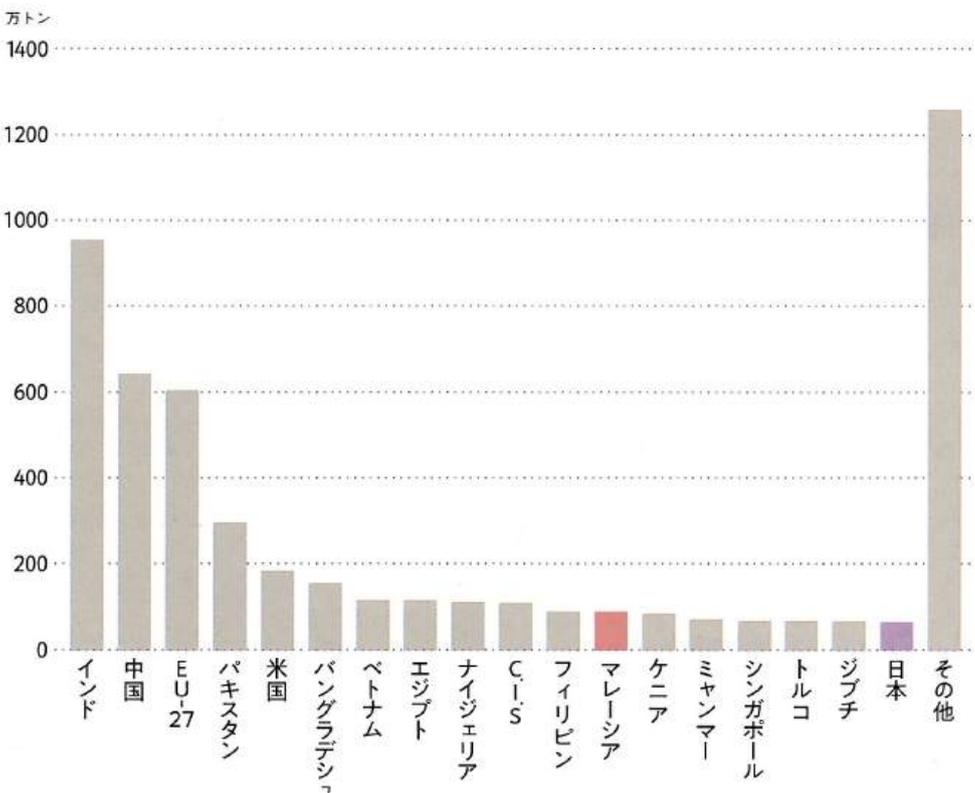
インドネシアは生産量の59%、マレーシアは83%も輸出している。2か国で全輸出量の85%を占めている。

単位: 万トン

国名	輸出量
インドネシア	2863.0
マレーシア	1513.1
タイ	90.3
グアテマラ	87.8
パプアニューギニア	74.0
ジブチ	66.6
ホンジュラス	51.5
コロンビア	46.9
アラブ首長国連邦	34.5
コートジボワール	25.7
コスタリカ	23.6
オマーン	17.6
その他	224.9
合計	5119.4

統計 2-4 パーム油の国別輸入量(2023)

Source : Oil World Annual 2024



日本も含めほとんどの国は自国で生産できないため全量輸入になる。マレーシアはパーム油加工業が盛んなので輸入もしている。

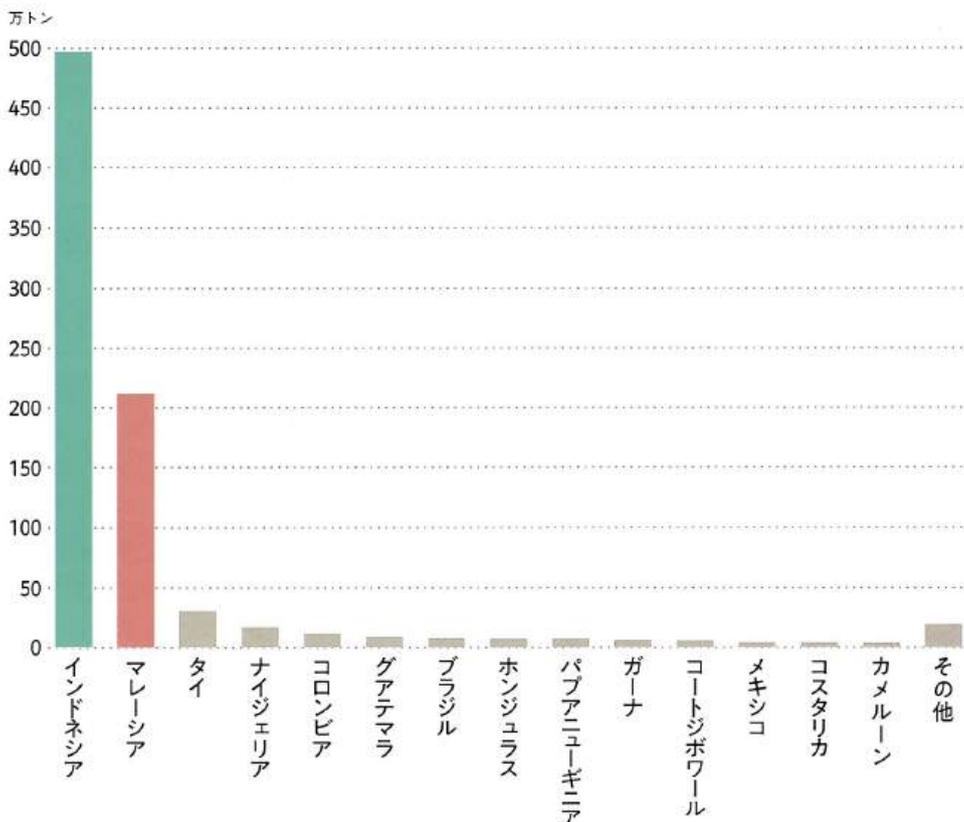
単位: 万トン

国名	輸入量
インド	955.0
中国	643.7
EU-27	605.6
パキスタン	298.4
米国	185.0
バングラデシュ	156.4
ベトナム	116.9
エジプト	116.9
ナイジェリア	113.1
C.I.S	111.2
フィリピン	89.9
マレーシア	89.7
ケニア	84.7
ミャンマー	72.0
シンガポール	69.0
トルコ	69.0
ジブチ	67.8
日本	67.1
その他	1261.4
合計	5172.7

統計 3 パーム核油

統計 3-1 パーム核油の国別生産量(2023)

Source : Oil World Annual 2024



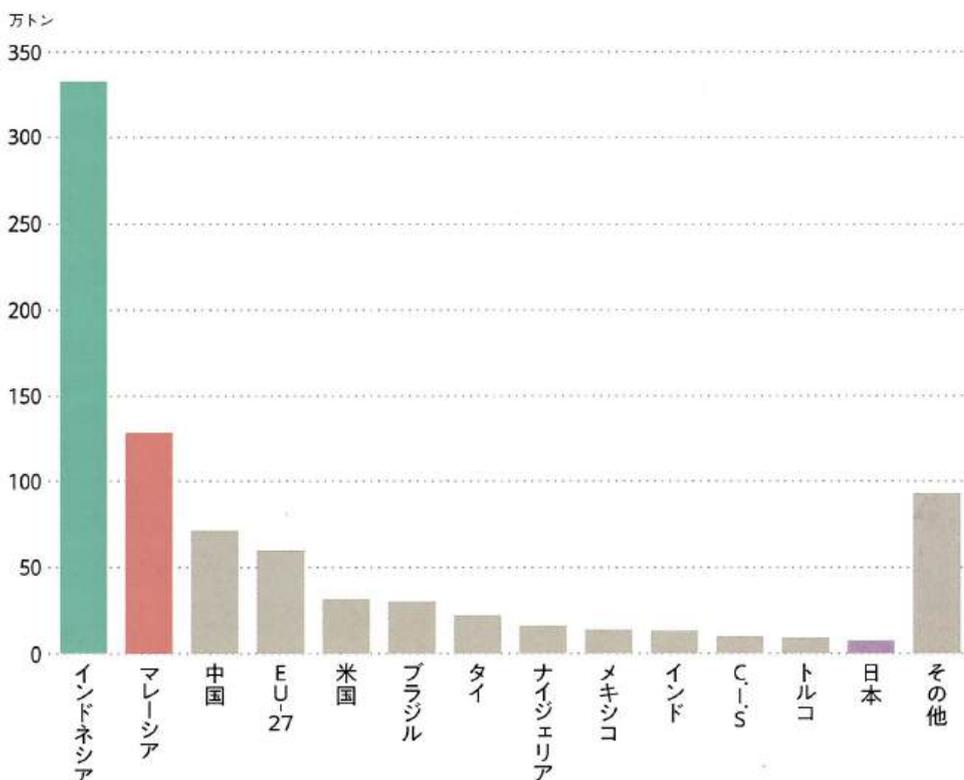
核油の総生産量、生産国ランキングは昨年とほとんどかわっていない。パーム核油は、アブラヤシの核(タネ)から採るが、収穫量はパーム油の10%程度。

単位: 万トン

国名	生産量
インドネシア	496.8
マレーシア	211.7
タイ	30.8
ナイジェリア	16.8
コロンビア	11.5
グアテマラ	9.3
ブラジル	7.9
ホンジュラス	7.4
パプアニューギニア	7.4
ガーナ	6.3
コートジボワール	6.0
メキシコ	4.2
コスタリカ	4.1
カメルーン	3.8
その他	19.1
合計	842.8

統計 3-2 パーム核油の国別消費量(2023)

Source : Oil World Annual 2024



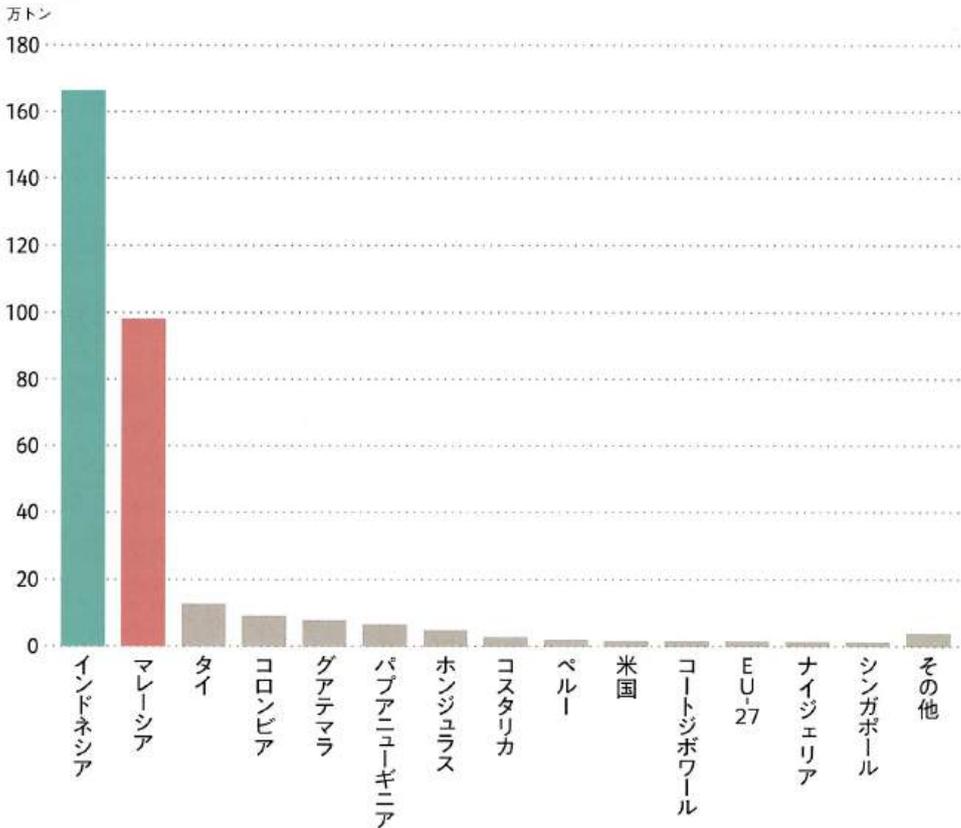
核油の消費が多いのはインドネシア、マレーシア、中国、EU-27、米国。インドやパキстанはパーム油の消費量が多いが、核油はあまり多くはない。

単位: 万トン

国名	消費量
インドネシア	332.3
マレーシア	128.1
中国	71.3
EU-27	59.5
米国	31.2
ブラジル	30.0
タイ	22.1
ナイジェリア	15.9
メキシコ	13.6
インド	13.0
C.I.S	9.7
トルコ	9.0
日本	7.4
その他	92.5
合計	835.4

統計 3-3 パーム核油の国別輸出量(2023)

Source : Oil World Annual 2024



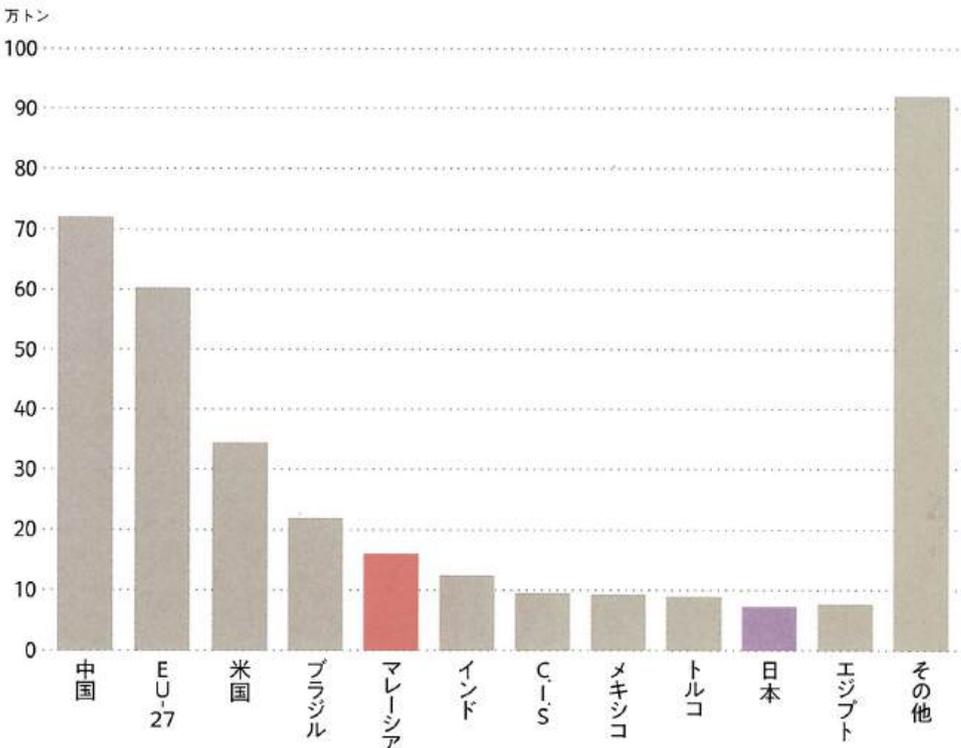
生産量が多いインドネシア、マレーシアは当然輸出量が多いが、コロンビア、グアテマラ、パプアニューギニアは生産した核油のほとんどを輸出している。

単位: 万トン

国名	輸出量
インドネシア	166.6
マレーシア	98.2
タイ	12.8
コロンビア	9.3
グアテマラ	7.9
パプアニューギニア	6.7
ホンジュラス	4.9
コスタリカ	3.0
ペルー	2.2
米国	1.9
コートジボワール	1.9
EU-27	1.8
ナイジェリア	1.6
シンガポール	1.4
その他	4.1
合計	324.1

統計 3-4 パーム核油の国別輸入量(2023)

Source : Oil World Annual 2024



核油の輸入は中国、EU-27、米国が多くインドは少なめ。「その他」の国の輸入量が非常に多く、核油が世界各国で使用されていることがわかる。

単位: 万トン

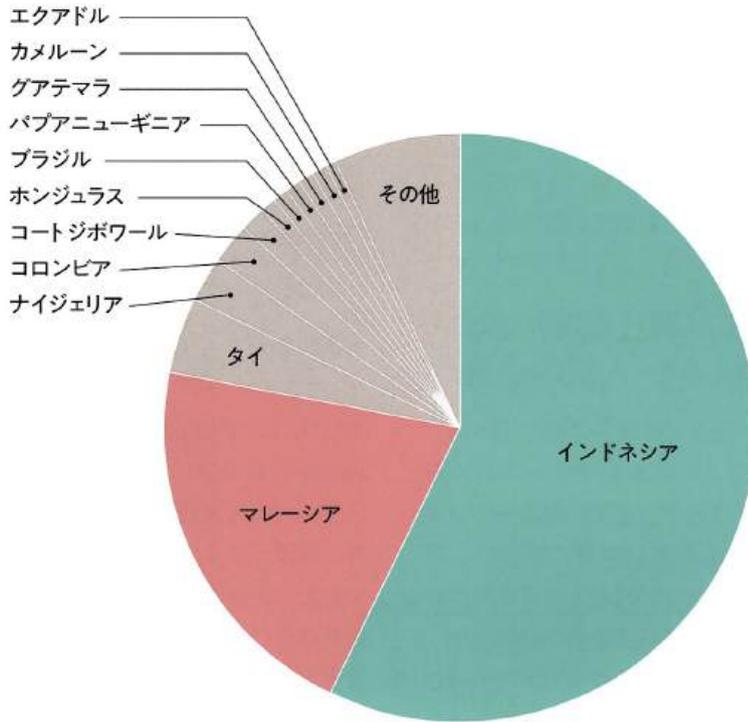
国名	輸入量
中国	72.1
EU-27	60.4
米国	34.5
ブラジル	22.0
マレーシア	16.1
インド	12.5
C.I.S	9.6
メキシコ	9.4
トルコ	9.0
日本	7.4
エジプト	7.8
その他	92.2
合計	319.4

統計4 アブラヤシ栽培面積の変遷

統計4-1 国別アブラヤシ収穫可能面積・単収(2023)

Source: Oil World Annual 2024

インドネシアの農園面積が圧倒的に広く、全体の57%を占める。アブラヤシの単収はグアテマラが非常に高く、アフリカ諸国は概して低い。



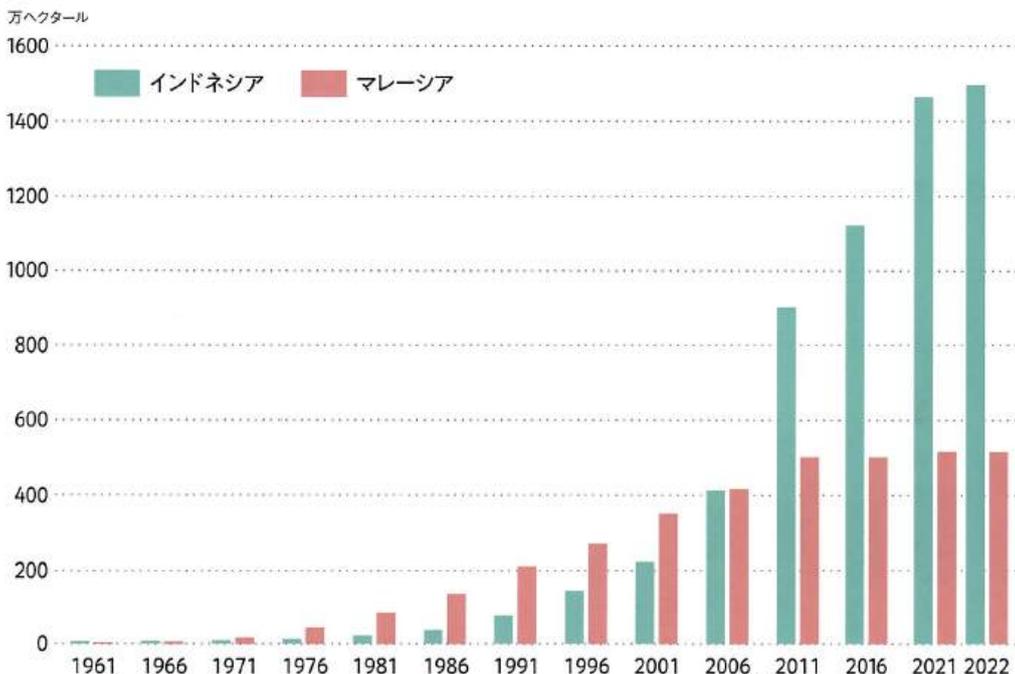
単位: 万ヘクタール トン/ヘクタール

国名	収穫可能面積	単収
インドネシア	1417.0	3.42
マレーシア	510.0	3.64
タイ	103.0	3.21
ナイジェリア	62.0	2.35
コロンビア	53.5	3.44
コートジボワール	33.0	1.79
ホンジュラス	22.5	2.98
ブラジル	21.5	3.40
パプアニューギニア	21.0	3.67
グアテマラ	20.5	5.02
カメルーン	18.3	1.75
エクアドル	14.8	3.19
その他	168.9	2.02
合計/平均	2466	3.31

統計4-2 インドネシアとマレーシアのアブラヤシ栽培面積変遷

Source: FAO STAT 2024年10月26日閲覧

2006年ごろはインドネシアとマレーシアの農園面積はほぼ同じだったが、その後インドネシアは急速に開発が進み、今ではマレーシアの約3倍の農園面積になっている。



単位: 万ヘクタール

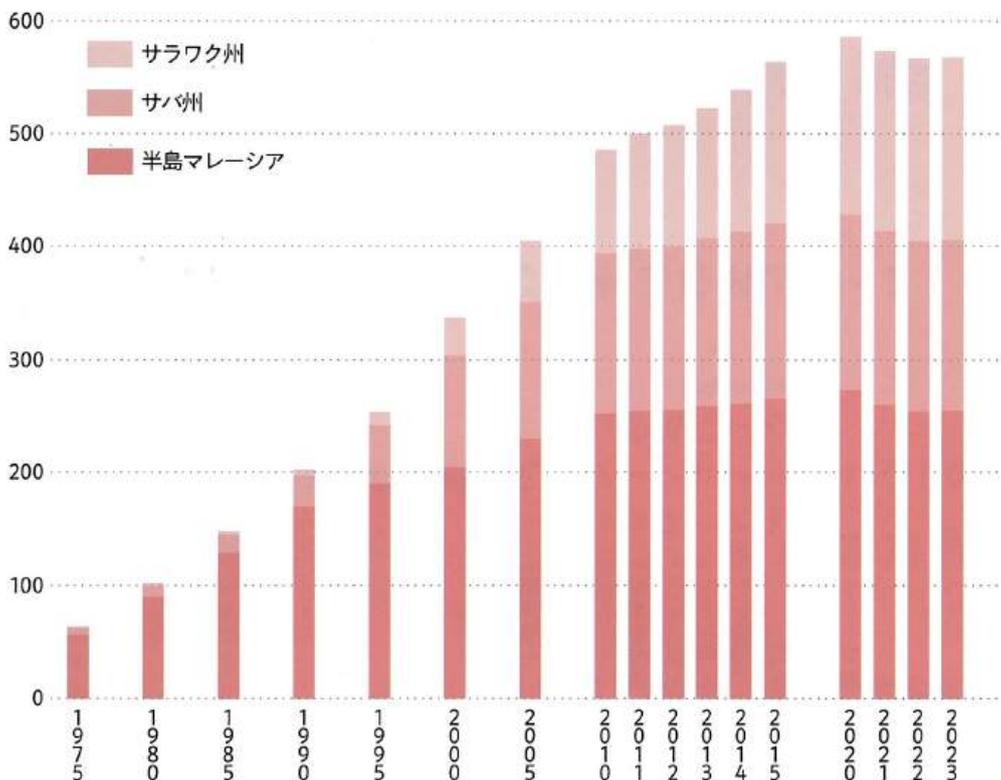
	インドネシア	マレーシア
1961	7.0	4.3
1966	8.5	6.7
1971	9.5	18.4
1976	13.0	45.4
1981	23.0	84.8
1986	37.4	136.1
1991	77.2	209.4
1996	142.8	269.2
2001	220.0	349.9
2006	411.0	416.5
2011	899.3	500.0
2016	1120.1	500.1
2021	1462.2	514.4
2022	1495.3	513.6

統計 4-3 マレーシアの州別アブラヤシ栽培面積変遷

Source: MPOB Department of Statistics, Malaysia

サバ州では90年代から急速に開発が進んだが、2010年代に頭打ち状態になっている。サラワク州は2010年代から農園拡大し、2020年にはサバ州を追い抜いた。

万ヘクタール



単位: 万ヘクタール

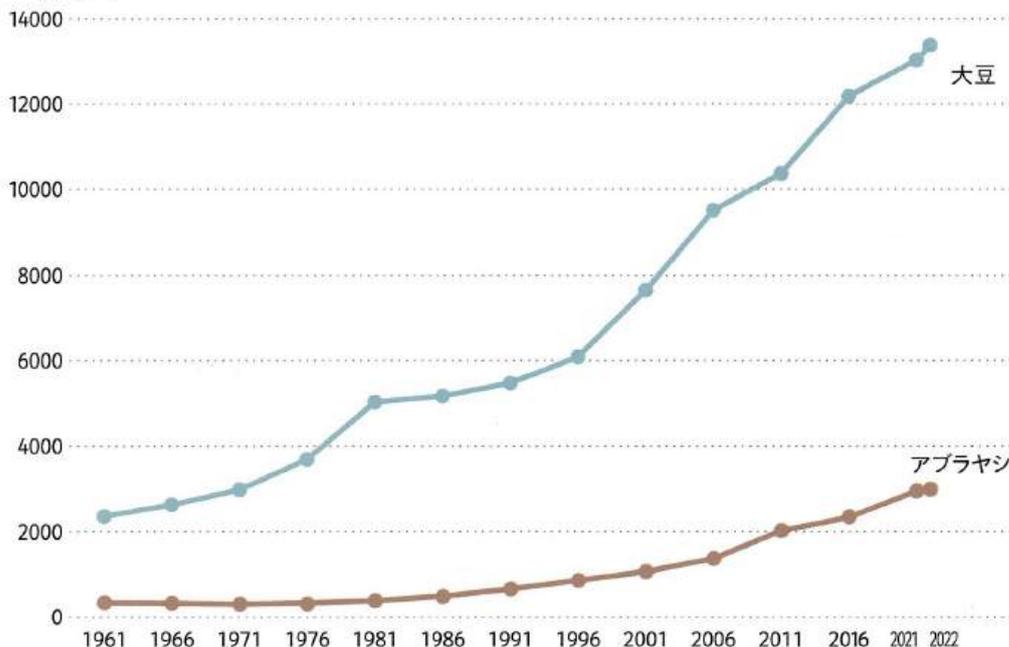
	半島マレーシア	サバ州	サラワク州
1975	56.9	5.9	1.4
1980	90.7	9.4	2.3
1985	129.2	16.2	2.9
1990	169.8	27.6	5.5
1995	190.3	51.8	11.9
2000	204.6	100.0	33.0
2005	229.9	120.9	54.3
2010	252.7	141.0	92.0
2011	254.7	143.2	102.2
2012	255.8	144.3	107.6
2013	259.4	147.5	116.1
2014	261.7	151.2	126.3
2015	265.9	154.4	143.9
2020	273.8	154.3	158.5
2021	260.8	152.4	160.6
2022	254.4	150.8	162.2
2023	254.9	151.0	162.4

統計 4-4 大豆とアブラヤシの栽培可能面積変遷

Source: FAO SATT 2024年10月28日閲覧

アブラヤシの作付面積はこの60年間で8倍になり、3000万haに達した。一方、大豆は6倍に広がり1億3400万haで、アブラヤシの4倍以上になっている。

万ヘクタール



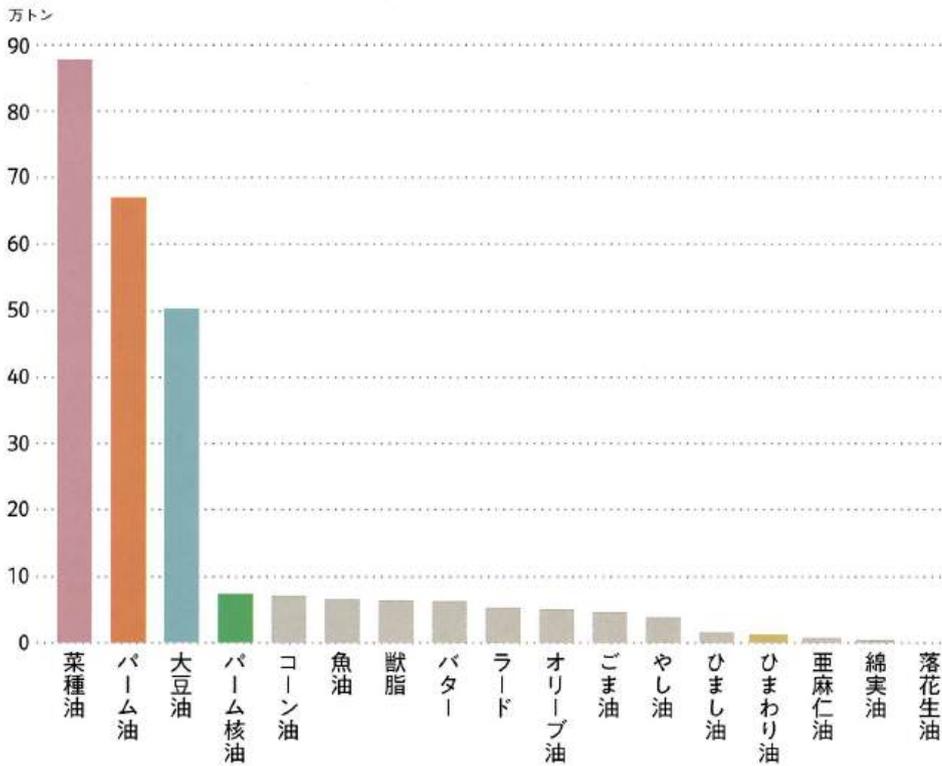
単位: 万ヘクタール

	大豆	アブラヤシ
1961	2381.9	362.1
1966	2653.4	352.4
1971	3003.4	331.2
1976	3716.8	359.3
1981	5047.6	407.8
1986	5189.6	514.7
1991	5492.5	680.4
1996	6107.9	881.9
2001	7676.3	1086.6
2006	9533.5	1388.0
2011	10386.7	2038.4
2016	12204.8	2347.6
2021	13047.7	2961.5
2022	13379.2	3001.7

※小数点第2位で四捨五入しているため、合計がずれている場合があります。
 ※新型コロナウイルス感染症の影響で、様々な業務が遅れています。統計は後日修正される可能性があります。

統計 5-1 日本の油脂別消費量(2023)

Source: Oil World Annual 2024



日本の油脂消費量は昨年とほぼ同じ。大豆油と菜種油が若干減少し、パーム油が微増している。

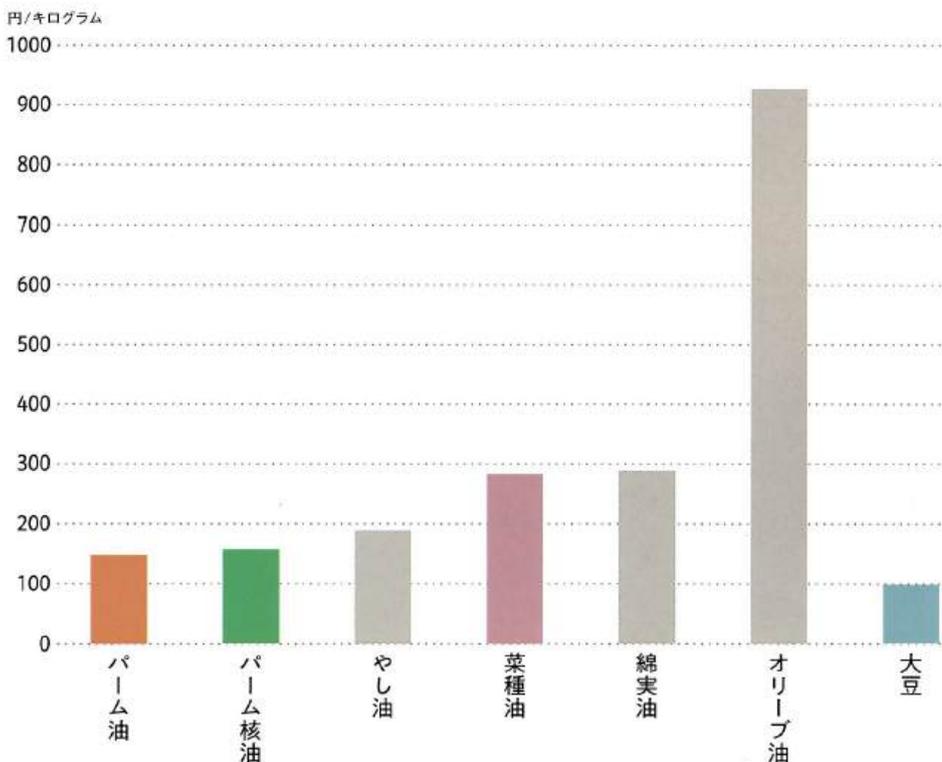
単位: 万トン

種類	消費量
菜種油	87.8
パーム油	66.9
大豆油	50.3
パーム核油	7.4
コーン油	7.1
魚油	6.6
獣脂	6.4
バター	6.3
ラード	5.4
オリーブ油	5.1
ごま油	4.7
やし油	3.9
ひまし油	1.7
ひまわり油	1.3
亜麻仁油	0.8
綿実油	0.5
落花生油	0.01
合計	262.0

※統計には入っていないが、米油を約7万トン消費している

統計 5-2 植物油・大豆の輸入価格(2023)

Source: 農林水産省農作物輸出入統計



昨年と比べると、オリーブ油は高騰しているが、他の油はやや値下がりしている。大豆油は大豆を輸入して国内で搾油するため、大豆の価格を掲載した。

単位: 円/キログラム

種類	輸入価格
パーム油	147.6
パーム核油	156.8
やし油	187.9
菜種油	282.3
綿実油	287.7
オリーブ油	926.9
大豆	98.1

緑の回廊プロジェクト

ボルネオ保全トラスト・ジャパンは、豊かな生態系を未来に残すため、ボルネオ島北部キナバタンガン川下流域に残された熱帯雨林を保護して野生動物の生息域を確保し、多様な生物が命をつなげる環境を未来に残すための活動を続けています。

ボルネオ島北部に位置するマレーシアのサバ州では、森林伐採やアブラヤシプランテーションの急激な開発により過去50年で360万haもの広大な熱帯雨林が失われました。野生動物は生息地を迫られ、個体数は大きく減少しました。

生物多様性の宝庫として知られるキナバタンガン川流域も例外なく大規模開発が進みました。

2005年によく制定されたキナバタンガン下流域野生動物保護区はプランテーションや私有の森にすっかり囲まれていました。

今後も開発が進めば動物たちの生息域はさらに分断され、自由な移動は遮られ、繁殖相手と出会う機会が減少し、遺伝子の多様性が低下します。

これらの課題を解決するためには野生動物が自由に移動できる森、「緑の回廊」が必要です。この回廊は保護区と保護区の間に残る森をつなぎ、生態系全体をつなぐ役割を果たします。

2006年、サバ州に「ボルネオ保全トラスト (BCT)」が設立されました。2008年には「ボルネオ保全トラスト・ジャパン (BCTJ)」が日本で生まれ、BCTと

ともに活動を始めました。皆様のご支援により、これまで緑の回廊プロジェクトのために1.6億円を超える寄附金が集まり、112haの森が取得できました。取得した森はサバ州政府に寄贈し、野生動物保護区にする手続きが進んでいます。

混迷を極める現代、生物多様性保全は地球温暖化防止と同じく人類共通の課題です。私たちはこれからもボルネオの地で生物多様性保全活動、自然環境保護活動に全力で取り組みます。今後とも末永いご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

完成予想図と現在(2025.1)までの取得地



発行：認定NPO法人 ボルネオ保全トラスト・ジャパン (BCTJ)
 制作：パーム油白書編集委員会 (青木崇史、中西宣夫、森井真理子)
 編集協力：細部文香 写真：中西宣夫 デザイン：根本睦子
 発行：2025年2月
 ■本書掲載記事の無断転用を禁じます。